

昭和58年度 日本体育協会スポーツ科学研究報告

No.V わが国一流コーチの社会的背景と
意識に関する研究

財団法人 日本体育協会

スポーツ科学委員会

昭和58年度 日本体育協会スポーツ科学研究報告

No.V わが国一流コーチの社会的背景と意識に関する研究

報 告 者 (財)日本体育協会研究プロジェクトチーム

わが国一流コーチの社会的背景と意識に関する研究班

班 長 稲 野 豊¹⁾

班 員 田 中 鎮 雄²⁾ 佐 伯 聰 夫¹⁾ 池 田 勝¹⁾

荒 井 貞 光³⁾ 永 島 悅 正⁴⁾ 鈴 木 守⁵⁾

生 沼 芳 弘⁶⁾ 古 屋 正 俊⁷⁾ 橋 本 純 一¹⁾

海老原 修⁸⁾

担当研究員 金 子 敬 二⁹⁾

この研究は、わが国における一流選手養成についてのコーチのあり方と選手養成制度に関する基礎資料を得ることが主なねらいである。

この研究で明らかにしたい主な内容は次のとおりである。

(1) 一流コーチのライフ・ヒストリーとスポーツ信条

(2) 選手養成経験と関連して

ア. コーチと選手の結びつきーとくに、人間的・時間的・社会的・経済的結びつきの状況について

イ. 選手養成の意識ーそのねらい、目的、重点
ウ. 練習をめぐる合宿・試合などについての考え方

エ. 練習時間・年間計画・シーズンオフの対処などについての考え方

オ. 選手養成の低年齢化に対する考え方

カ. 勝つことの意味

キ. 体力・気力・チームワーク等に対する考え方
ク. 選手の潜在的能力を引き出す方法

ケ. 技術、ルール等（スポーツ科学を含む）に対する考え方

コ. スポーツ creed についての考え方ー例え
ば、ジンクス・お守り・伝統・暗示・主義・
綱領など

サ. アマチュアリズムについての考え方

シ. 日本体育協会や種目協会との結びつきーそ
の現状と問題点

ス. 日本のスポーツの将来のあり方についてー
何をどうすべきか、またそのシステムをどう
考えるか、選手に期待するものなど。

研究手順は大きく以下の 2 つに分かれる。

(1) アンケート調査

体協に登録されている強化コーチ、ジュニア
強化コーチ、上級コーチ、コーチについての調
査

(2) 面接調査

ア. 一流コーチと一流選手に対する面接

① 個人種目…器械体操、水泳、シンクロ
ナイズドスイミング、マラソン

② 対人種目…柔道、レスリング

③ 団体種目…バレーボール、サッカー

イ. 日体協から海外派遣されたコーチに対する
面接（外国との比較に重点をおく）

ウ. 体協記者クラブに対する面接ー記者クラブ
の人たちのみた日本のコーチ…その現状と課
題

¹⁾筑波大学 ²⁾日本大学 ³⁾広島大学 ⁴⁾東京学芸大学

⁵⁾上智大学 ⁶⁾東海大学 ⁷⁾東京工大 ⁸⁾東京大学

⁹⁾日本体育協会スポーツ科学研究所

その1 一流コーチの社会的背景と意識に関するアンケート調査(結果)

報告者　糸野　豊　池田　勝　荒井　貞光　海老原　修

わが国一流コーチの社会的背景と意識に関するアンケート調査では、いわゆるトップアスリートの指導者の社会的背景やコーチ生活、選手養成などについての考え方を明らかにすることに重点をおいた。

調査は、日本体育協会国際競技力向上事業主任強化コーチ、同強化コーチ、同ジュニア強化コーチ、上級コーチ、コーチの5種類のコーチに登録された者を対象に実施された。調査の内容としては、一流コーチの社会的背景や意識を知るために、次のような内容から構成される調査用紙を作成した。

I. 社会的背景

性、年齢、学歴、職業

II. コーチになる理由と社会生活への影響

コーチになる動機、コーチ生活と社会生活

III. 指導の現状とコーチの評価

合宿数、試合数、指導状況への評価

IV. コーチングの実際と評価

指導上用いる言葉、練習のタイプと雰囲気、指導の理想と現実

V. 選手養成の環境と制度

指導環境、選手への加入形態

VI. コーチの現代スポーツ観

今日的問題への評価

VII. コーチをやめる理由、続ける意欲

VIII. 一流コーチのキャリア・パターン

表-1 コーチ別のアンケート回収結果

回収数／配布数

主任強化コーチ	10	/	17	= 58.8%
強化コーチ	68	/	114	= 59.6%
ジュニア強化コーチ	87	/	150	= 57.9%
上級コーチ	196	/	296	= 66.2%
コーチ	195	/	305	= 63.9%
計	556	/	882	= 63.0%

競技成績、指導担当レベルの推移

調査時期は、昭和58年10月～12月で、郵送留置法を用いた。回収率は、63.0% (=556/882) であった。その内訳は、表-1の通りである。

なお、回収数は556通であったが、各設問項目毎に欠損値があるので、回答数はそれぞれ異なる。

分析方法は、5種類のコーチを、強化コーチ群、ジュニアコーチ群、上級コーチ群、コーチ群と4種類に分類し、クロス集計、分散分析(Analysis of Variance, ANOVA) および重回帰分析に基づくパス解析 (Path Analysis) を用いて解析した。

I. 社会的背景

(1) 性別

表 I-1に示す通り、一流コーチに占める女性の割合は5%程度で、この傾向は強化コーチ、ジュニアコーチ、上級コーチ、コーチのいずれにおいても同じであることがわかる。

(2) 年齢

表 I-2は、コーチを年齢別に分類したものである。30代と40代で約80%を占めていることがわかる。各コーチ別にみた場合でも、ほぼ同様の傾向が認められる。しかしながら、強化コーチに占める50代 (15.4%)、ジュニアコーチに占める20代 (17.2%)、上級コーチに占める50代 (15.8%) の

表 I-1 性別

	N	男	女
全 体	552	95.3%	4.7%
強 化 コ ー チ	77	94.8%	5.2%
ジ ュ ニ ア コ ー チ	87	94.3%	5.7%
上 級 コ ー チ	176	96.9%	3.1%
コ ー チ	192	94.3%	5.7%

表 I-2 年齢

	N	20代	30代	40代	50代	60代
全 体	556	6.7%	40.6%	39.7%	11.5%	1.4%
強 化 コ ー チ	78	2.6%	38.5%	41.0%	15.4%	2.6%
ジ ュ ニ ア コ ー チ	87	17.2%	37.9%	36.8%	8.0%	1.0%
上 級 コ ー チ	196	2.0%	36.2%	44.4%	15.8%	1.5%
コ ー チ	195	8.2%	47.2%	35.9%	7.2%	1.5%

ように他のコーチ群と比べて差があることもわかる。

(3)父親の学歴

表I-3に示すように、コーチの父親の約半数(47.9%)は中卒であり、次いで高卒(28.5%)、大卒(16.4%)の順となっている。したがって、コーチの父親のほとんどが中等教育を受けているにとどまり、高等教育を受けた者は全体の2割強である。

コーチ別にみると、強化コーチとジュニアコーチでは上級コーチとコーチに比べて、大卒と高卒の父親が多く、中卒の占める割合が少ないことがわかる。

(4)父親の職業

表I-4より、コーチの父親の職業は、専門・技術的職業(26.3%)、自営業(24.6%)で半数を占め

表I-3 父親の学歴

	N	中学校卒	高校卒	短大卒	大学卒
全 体	505	47.9%	28.5%	7.1%	16.4%
強 化 コ ー チ	70	40.0%	31.6%	10.0%	18.6%
ジ ュ ニ ア コ ー チ	82	40.2%	31.7%	7.3%	20.7%
上 級 コ ー チ	181	52.5%	26.4%	7.2%	14.4%
コ ー チ	172	50.0%	28.7%	5.8%	15.7%

表I-4 父親の職業

	N	専門・技術職	管理職	自営業	事務系	販売系	労働系	農林漁業
全 体	480	26.3%	12.7%	24.6%	8.5%	2.3%	8.1%	17.5%
強 化 コ ー チ	67	20.9%	17.9%	29.9%	10.4%	3.0%	6.0%	11.9%
ジ ュ ニ ア コ ー チ	77	28.6%	10.4%	31.2%	11.7%	2.6%	3.9%	11.7%
上 級 コ ー チ	168	26.2%	12.5%	21.4%	9.5%	2.4%	8.9%	19.0%
コ ー チ	168	27.4%	11.9%	22.6%	5.4%	1.8%	10.1%	20.8%

表I-5 学歴

	N	中学校卒	高校卒	短大卒	大学卒	大学院修了
全 体	546	0.5%	12.5%	5.7%	77.8%	3.5%
強 化 コ ー チ	75	0%	14.7%	5.3%	76.0%	4.0%
ジ ュ ニ ア コ ー チ	87	0%	0%	1.1%	89.7%	9.2%
上 級 コ ー チ	194	1.0%	14.4%	6.7%	74.7%	3.1%
コ ー チ	190	1.5%	15.3%	6.8%	76.3%	1.1%

表I-6 職業

	N	専門技術職	管理職	大学の教員	小・中・高の教員	事務系	販売系	労務系
全 体	537	5.6%	10.4%	16.2%	42.3%	21.2%	1.7%	2.6%
強 化 コ ー チ	74	9.5%	12.2%	28.3%	15.0%	28.3%	1.4%	5.4%
ジ ュ ニ ア コ ー チ	85	9.4%	8.2%	43.6%	16.5%	17.6%	2.4%	2.4%
上 級 コ ー チ	193	3.6%	13.0%	8.8%	54.4%	17.6%	1.0%	1.6%
コ ー チ	185	4.3%	8.1%	8.1%	50.2%	24.3%	2.2%	2.7%

ていることがわかる。コーチ別では、農林漁業に占める割合は、上級コーチ(19.0%)、コーチ(20.8%)に多いことが注目される。

(5)学歴

表I-5は、コーチ自身の学歴を示したものである。大卒が大半を占め(77.8%)、これに大学院修了(3.5%)と短大卒(5.7%)を加えると87.0%となり、コーチの約9割が高等教育を受けていることがわかる。コーチ別でみると、強化コーチ、上級コーチ、コーチには高卒者が15%前後いるのに対して、ジュニアコーチでは1人もいないことは注目される。

(6)職業

表I-6は、コーチ自身の職業を示したものである。全体としては、大学の教員(16.2%)と小学校・中学校・高校の教員(42.3%)で、58.5%と約6割

を占めていることがわかる。コーチ別にみると、強化コーチとジュニアコーチの大学の教員に占める割合が約3~4割であり上級コーチやコーチに比べて高い割合を示している。一方、これとは逆に小・中・高の教員では、強化コーチとジュニアコーチが15%程度にすぎないのに対して、上級コーチ(54.4%)とコーチ(50.2%)では過半数を占めている。

(7)まとめ

以上、コーチの社会的背景をまとめると次の通りである。

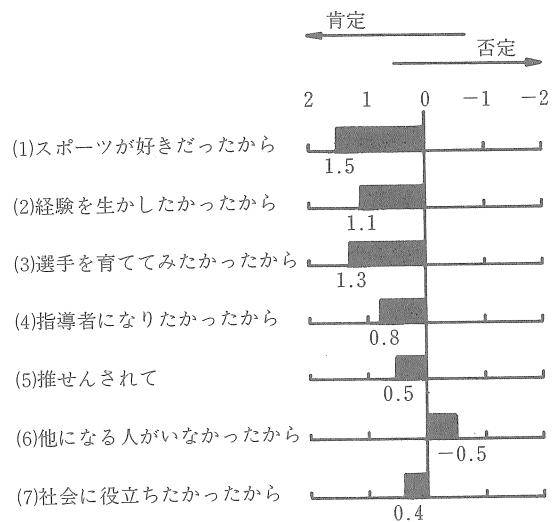
- ①コーチに占める男性の割合は95%を占め、女性コーチは5%程度である。
- ②コーチの父親は、中卒者が約半数を占め、中等教育を受けた者が3/4を占める。
- ③コーチの父親の職業は、専門・技術的職業と自営業で半数を占める。
- ④父親の学歴と職業から、強化コーチとジュニアコーチは、上級コーチやコーチに比べて、生活水準のいくらか高い家庭の出身であることが推察される。
- ⑤コーチの9割弱が高等教育を受けている。
- ⑥コーチの職業は、教員が約6割を占める。強化コーチとジュニアコーチでは大学の教員、上級コーチとコーチでは小・中・高の教員が多い。

II. コーチになる理由と社会生活への影響

指導者の責任や役割が重視されるほど、選手以上に指導者自身へ社会的プレッシャーが重くのしかかる。コーチ達は、どういう理由やきっかけから現在の立場につくのだろう。

(1) 個人的動機からコーチになる

図II-1は、「スポーツ好きだったから」から「社会に役立ちたかったから」の個人的-社会的レベルの動機や理由7つについて、それぞれの答えをまとめている。+2ほど肯定的理由で、-2ほど否定的理由である。「スポーツ好きだったから」1.5、「選手を育ててみたかったから」が1.3、「経験を生かしたかったから」が1.1と高い。これに比べると、「社会に役立ちたかったから」とか「推せんされて」の答えは低い。これからすると、コーチの立場につくのは、個人的レベルの理由や動機が多く、社会的レベルの割合は少ないといえる。しか



※積極肯定を2、肯定を1、中間的解答を0、否定を-1、積極的否定を-2としてそれぞれの平均スコアを示した。

※Q、「あなたがコーチとして指導するようになったのはどういう理由からですか。」

図II-1 コーチになる理由・動機

し、個人的レベルの問題解決や処理でおさまらないのが、スポーツ指導者をとりまく現状である。

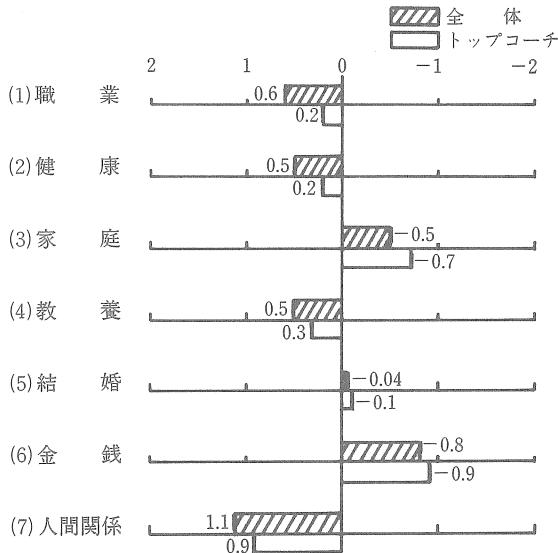
表II-1は、「社会に役立ちたかったから」の答えの内訳である。「どちらともいえない」層が多いことがわかる。個人的レベルでは肯定、否定の傾向がよく出るが、社会的レベルになるといろいろ条件や要素が入りこみ全体として評価しにくくなるコーチの心情が推察される。

表II-1 「社会に役立ちたかったから」の内容(%)

肯 定	どちらともいえない	否 定
44.7	39.9	15.4

(2)実生活へのプラスとマイナス

図II-2は、+2ほど実生活にプラスに影響し、-2ほどマイナスに作用していることを示す。実生活への影響を評価するのは、コーチ自身にとって難しいようだ。図からすると、0の軸からあまりスコアがのびないのは、プラスの評価、マイナスの評価をしにくいことを意味している。例えば、「結婚」をみると、コーチ全体では-0.04、トップコーチでは-0.1のスコアが示される。百分率(%)でこれをみると、コーチ全体の71.7%，トップコーチの77.1%は「どちらともいえない」と答



※Q.「今まで指導してきたことが次の事項についてどのくらいプラスに、ないしはマイナスになりましたか」

※トップ・コーチは強化コーチをさす。

図II-2 プラスの影響とマイナスの影響
えているからである。

そういう前提にたって、結果をみると、「金銭」のマイナス評価、「人間関係」のプラス評価がよくわかる。「家庭」のマイナス評価も認められよう。

トップコーチの評価を意識してみると、「職業」「健康」「教養」「人間関係」のプラス評価において、コーチ全体のスコアより劣り、また「家庭」「結婚」「金銭」のマイナス評価でも、スコアが高いことがわかる。一言でいえば、トップコーチほど、実生活への影響はきびしいものがあるということになろう。

一流コーチをとりまく環境や条件の厳しさは、プラスの評価があまりに少なすぎることから明白である。現在プラス評価のものは、せめてプラス1のスコアになるように、マイナス評価はひとまず0になるように考える必要がある。「スポーツ好きだったから」や「選手を育ててみたかったから」等にみたコーチになるはじめのエネルギーを絶やさない社会的配慮が望まれる。

III. 指導の現状とコーチの評価

一流コーチといわれる人達の指導の現状をとらえることは難しい。指導内容が実際の練習場面の指導だけでなく、各種の委員会や会議等に出席す

る機会も多く、また複数のチームを指導する場合も多いからである。ここでは、「公認コーチとしてのコーチング時間」ということに限定して、試合帯同数や合宿帯同数に絞ってみる。同時に、それらの現状に対してコーチ自身の評価はどうかも明らかにする。

(1)指導の現状

表III-1は、それぞれの内容について回答してもらい、全体の平均を示したものである。「帯同」という表現自体が抽象的になり、回答比率もやや少ないが、一つの傾向として見ていく。

合宿帯同については、国内、国外を合わせると、約5回、日数にして50日が費やされている。年間では約7週間の合宿生活が続くというのがコーチ達の現状である。強化コーチなどトップコーチになると、日数にして10日前後増えることがわかる。試合帯同についてみると、国内では約5回、日数にして約23日、国外は約2回、24日になる。トップコーチとの比較をみると、国内での差はあまり見られず、やはり国外の場合の差がよく認められる。

合宿と試合の日数を単純に合わせると、国内、国外とも50日前後になる。さらに国内と国外の結果を合わせると、実に約100日間が合宿と試合のスケジュールに組みこまれている。トップコーチの場合はさらにこれをうわまわる。これに普段の練習等が入ることになるが、それを合わせて考えると、〈休みは正月3ヶ日だけ〉などという選手生活の実情が指導者の側からもうらづけられ、ハードなスケジュールの中にいる選手とコーチの姿がう

表III-1 指導の現状

	回 数	日 数
合宿 につ いて	国内	3.6回 (4.6回)
	国外	1.5回 (1.7回)
試合 につ いて	国内	4.9回 (4.7回)
	国外	1.9回 (2.4回)

※それぞれは平均値を示している

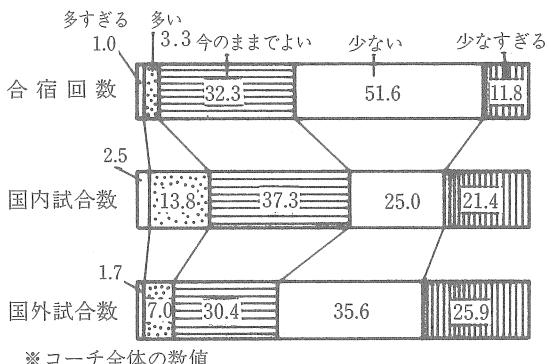
※()内はトップコーチの数値

かび上る。

(2)コーチ自身の評価

図III-1は、コーチ自身の合宿や試合の量に対する評価である。合宿回数については、少ないとする回答項目を合わせると、63.4%となる。同様に、国外試合数についても61.5%が少ないと答える。これに比べて、国内試合数は少ないとする割合は46.4%と過半数をわっている。合宿回数等の評価では、コーチのレベルによる差はほとんど認められない。むしろ、どのくらいの回数の回答に「少なすぎる」「多すぎる」という評価がなされるか、この分析が必要だろう。それにしても、練習に関しては、少ないとする層が多いが、全体からとらえ直すと、多い、少ないとする評価は大きく分かれているという見方が重要ではないか。

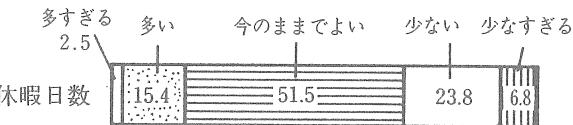
図III-2は、逆に休暇日数から指導や選手生活を見たものである。休暇が多いとする者の割合は合わせて17.9%，今までよいとする者が51.5%，少ないとする者は30.6%となる。「今までよい」とする者の割合が最も高いが、「少ない」とする割合が「多い」よりも高い点は注目される。先の合宿や試合数との関わりを合わせてまとめると、コーチ達は選手をもう少し休ませてあげたい



※コーチ全体の数値

※Q.「一流選手を養成するまでの練習回数等について、公認コーチとしてのあなたの判断をお知らせ下さい」

図III-1 合宿と試合数の評価 (%)



図III-2 休暇日数についての評価 (%)

し、しかし一方でもっと練習させる必要を感じている。そのジレンマに陥っているコーチが少なからずいるということだろう。

IV. コーチングの実際と評価

(1)ことば分析

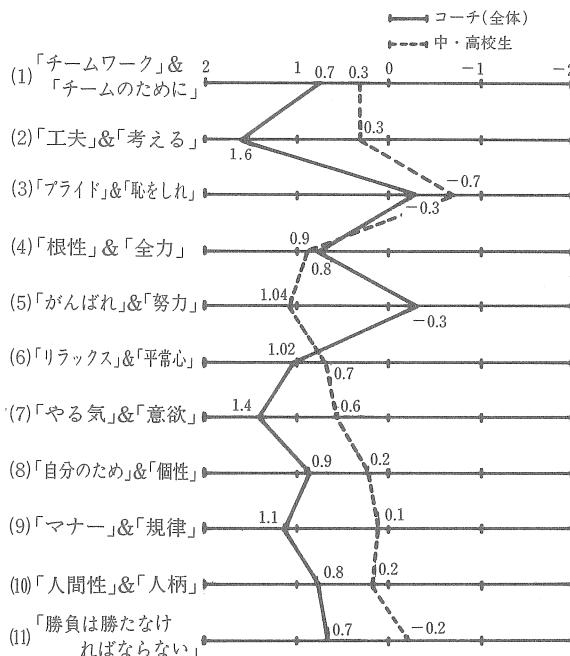
実際の指導を記述するのは難しい。VTRなどの機器を用いて観察、分析するのが一般的である。いわゆる時間・動作分析の手法を使用して行われる。

今回は、ことば分析とでもいう方法をとってみた。この方法を用いる理由として次の2つをあげる。1つは、現代のスポーツ指導は指導者と選手のコミュニケーションが非常に大切になっており、どのように相互作用するかという時、ことばというメディアがあらためて重要な要素になっているということである。うまく説明してやること、タイミングのよい時にビシリときまることばを投げかけること等の重要性である。もう1つは、ことばは使う人の価値観や思想を表わすという根本的な問題である。使うことばのタイプによって、その人のコーチングの特徴が推測できるのではないかと思われる。

図IV-1は、コーチが使うことばを「よく使う」スコア+2から「全く使わない」スコア-2の平均値を軸にプロットし、中・高校生が好むことばを「とても好き」+2から「とても嫌い」-2として、同じようにプロットし、比較したものである。

結果はいくつかの点で特に注目される。1つは、コーチが使うことばに多様性が見られること。つまり、いろいろなことばでコーチングが成り立っている。それらの中でも、特に「工夫」と「考える」が1.6、「やる気」と「意欲」1.4などが高いスコアになっている。これに比べて、「プライド」と「恥をしだれ」や「がんばれ」と「努力」などはマイナススコアになっている。一般にスポーツ指導のイメージというと、ひと頃のモーレツなしごきや頑張り精神また根性などが思いうかぶが、一流のコーチ達の用いることばはこれらのイメージと異なっているといえそうである。コーチのレベルによって使うことばに差があることも考えられよう。

中・高校生のデータと比較すると面白い。コーチと評価が逆に出る項目が2つある。「根性」と「全



* 中・高校生のデータは広島県内の中・高校生 3,217 人に調査したものである。

* 中・高校生は、部加入者も非加入者も入っている。

* Q. 「実際に指導する場合はコーチと選手の関係は言葉によって行われます。下の(1)～(11)によく使われる言葉をあげています。あなたは指導する上でどの言葉をよく使いますか。それについて「非常によく使う」から「全く使わない」の間に答えて下さい」→コーチの調査

* Q. 「スポーツをする場合、いろいろな言葉が使われます。下の(1)から(11)によく使われる言葉をあげています。あなたはスポーツをする上でどの言葉が好きですか。それについて、「とても好き→5」から「とても嫌い→1」の中であなたにあてはまる程度を選んで答えて下さい」→中・高校生の調査

図IV-1 使うことば、使わないことば

力」、「がんばれ」と「努力」がそれである。中・高校生は、根性やがんばり精神を高く認めるが、一流コーチの方はあまり認めていないことがわかる。また、コーチと中・高校生のスコアの間で差が大きいものは、「工夫」と「考える」、「がんばれ」と「努力」や「マナー」と「規律」などが特にあげられる。「根性」と「努力」は差が少ないが、他の項目は全てにわたってかなり相違が認められる。

ここでは、コーチと中・高校生の結果を比べてみた。使うことばやそのことばの使い方でコミュ

ニケーションに差が生じ、具体的なスポーツ指導にとってマイナスが出てしまうことが予想される。

(2)指導の理想と現実のズレ

選手養成の上で、選手自身が描く選手生活と現実のズレは意味が大きいと思われる¹⁾。理想と現実はできるだけ一致している方が望ましい。同じことは、指導者自身の理想の指導と現実の指導のズレについてもいえるのではないか。

表IV-1は、ことば分析でもとり上げた「工夫」や「考える」指導について見たものである。これからすると、コーチ達は望ましい練習の仕方として「(自分で)考えたり、工夫してやる」を56.2%と多くあげる。しかし、現実には、この練習のタイプは4.6%の割合しかないことがわかる。同じように、「(仲間と)考えたり、工夫してやる」タイプを望ましいとする割合は30.2%だが、現実には

表IV-1 練習タイプの理想と現実(%)

	(自分で) 考えたり 工夫して やる	(仲間と) 考えたり 工夫して やる	監督の 計画通り にやる	(考え方 や計画 よりも) 全力をつく してやる	そ の 他
望ましいと 思うタイプ	56.2	30.2	3.8	6.0	3.7
現実に多い タイプ	4.6	12.2	73.7	3.7	5.7

* Q. 「あなたは指導者として、どのように練習する選手のタイプが望ましいと思いますか。また現在の選手はどのように練習するタイプが多いですか。」

* コーチ(全体)

表IV-2 現役時代の練習タイプ(%)

	(自分で) 考えたり 工夫して やる	(仲間と) 考えたり 工夫して やる	監督の 計画通り にやる	(考え方 や計画 よりも) 全力をつく してやる	そ の 他
自分のタイプ	53.9	22.3	11.8	11.1	0.9

* コーチ(全体)

表IV-3 霧囲気の理想と現実(%)

	いつも きびしき い	き び し さ & な ご や か さ	いつも な ご や か	わ か ら な い
望ましいと思う ムード	8.6	86.6	4.0	0.8
選手が望ましい と思うムード	1.5	69.7	26.8	1.9

※Q.「今の部員や選手は、部・クラブのどういう霧囲気や人間関係を望んでいると思いますか。また、あなた自身はどれがよいとお思いですか。」

※コーチ(全体)

12.2%でしかない。逆に、「監督の計画どうりにやる」は、コーチ達の3.8%しか望ましいタイプとして認めないが、現実にはこのタイプが73.7%と圧倒的に多い。選手自身の工夫や考え方を主軸にする練習は、現実には難しいことがわかる。

表IV-2は、コーチ自身の現役時代の練習タイプをまとめたものである。コーチ自身は考え方や工夫を重視した練習タイプの割合が最も高い。したがって、自分のキャリアからして、また望ましさからも、選手自らの工夫や思考の大切さを強く認めているが、眼の前の選手達がそういかないギャップの及ぼす影響は大きいのではないか。現在の一流コーチ達自身、現役時代は一流の選手として活躍してきた者が多いことも合わせて考えたい。

同じような視点から、スポーツクラブや運動部の霧囲気についてみてみる。スポーツ練習や選手生活に厳しさは必要不可欠だが、必ずしも厳しさだけではすまないのでない。ここでは、練習中の厳しさと練習外の和やかな関係を考えてみた。

表IV-3を見ると、コーチ達は「きびしさ＆なごやかさ」を大部分が求めている。また、選手達も「きびしさ＆なごやかさ」を望むと推測する割合が高い。練習中は心身共にわたる厳しさを、しかし練習を離れた時間、空間では一転して和やかさをつくり出すということは、難しいことかもしれない²⁾。

コーチングの実際を、練習のタイプと霧囲気の2つに絞ってまとめてみた。特に、それらの理想と現実のギャップの存在が、具体的なコーチングをしていく上でマイナスとして作用する面は少なくないと思われる。技術や戦略が高度化し、また選手養成の体制が制度化、複雑化する中で、もう一度、ここでとり上げた問題等について見直していく時期ではないだろうか。

V. 選手養成の環境と制度

現在の選手養成を考える上で欠かせない視点は、一方では先の霧囲気やことば分析のようなミクロな視点と、もう一つは選手がどのような環境におかれ、制度的にどういう養成システムが確立されているかというマクロな分析視点である。ここでは、環境の問題を地域のスポーツ活動状況や選手への関心や熱意から、また養成システムの問題については加入経路から見てみる。

(1)周りの関心・熱意

指導者の悩みの一つに、職場や学校、家庭の理解や支持が得られないというものがあると考えられる。理解や支持の内容は、精神的なものから金銭的なものまで幅があろう。選手の養成が大がかりになる程、指導者個々の熱意や力ではまかないきれなくなる。

表V-1は、コーチ達が職場や学校、また地域で表V-1 周りの理解・熱意(%)

	「 手 に 対 し て も 関 心 は 高 い 」	「 選 手 に 対 し て は 盛 ん だ が 、チ ー ム や 選 手 は 低 い 」	「 選 手 に 対 し て は 盛 ん だ が 、チ ー ム や 選 手 は 低 い 」	「 ス ポ ー ツ は 盛 ん だ が 、チ ー ム や 選 手 は 低 い 」	「 ス ポ ー ツ は 盛 ん だ が 、チ ー ム や 選 手 は 低 い 」	「 そ の 他 」
全 体 (536人)	36.2	46.1	14.4	3.4		
トップコーチ(73人)	53.4	30.1	12.3	4.1		
コーチ (188人)	23.4	54.8	18.6	3.2		

※トップコーチは高いレベルの指導者でいわゆる強化コーチ達をさす。

※Q.「あなたが指導しているチームや選手の周囲（例えば職場や学校）はどういうタイプのところですか？」

選手養成、指導を進めるのに周囲の支持や、またスポーツそのものへの関心がどのくらいあるかをまとめたものである。

コーチ全体の結果からすると、スポーツそのものは盛んだという評価は合わせて約8割になる。しかし、自分の選手やチームについての理解・熱気は、「低い」とする方が「高い」とする答えより約10%ほど多い。スポーツ全般への関心と、選手づくりやチームづくりへの関心は、評価がわかれるとのことだろう。

トップコーチとコーチのレベルからみると、トップコーチをとりまく周りの理解・熱気は53.4%が「スポーツが盛んで、チームや選手に対しても関心は高い」と回答した。一方、低いコーチのレベルになると、「スポーツが盛んで、チームや選手に対しても関心は高い」とする割合は、23.4%と低くなっている。強化コーチなど一部のコーチを除いて、大部分の指導者達をとりまく周囲の理解や支持は低いといわざるを得ない。スポーツ自体への関心の高まりにどのようにつなげていくかがポイントになろう。

(2)選手の加入形態

表V-2を見ると、選手は自発的に入ってきたり(46.4%)、勧誘されて入ってくる(31.3%)ケースが多い。しかし、コーチのレベルによって加入形態に差が出ている。トップコーチの場合は、「選抜や代表の形で入ってくる」が37.1%と最も多いが、

表V-2 選手の加入形態 (%)

	自発的に入る	指導者が送りこむ	選抜や代表の形で入る	勧誘されて入る	その他
全 体 (496人)	46.4	8.5	8.9	31.3	5.0
トップコーチ (70人)	18.6	10.0	37.1	28.6	5.7
コ ー チ (178人)	57.3	8.4	5.1	23.6	5.6

※「あなたが指導している部やクラブでは選手はどのような形で入ってくることが多いですか」

「勧誘されて入る」28.6%、「自発的に入る」18.6%など、入り方の形態は分散している。

選手の加入経路の解明は、公けにしにくい部分が多い。指導者間の結びつきによって、選手が徐々に高いレベルのチームへ送りこまれたり、特定の学校間で一定のルートが暗黙のうちにできたり、また有名私立校などになるとスカウト網が全国にはりめぐらされたりする。よい素質、よい性格のジュニア選手達をどのように見い出し、よりよい環境のチームやクラブに送りこんでいくかのシステムづくりは、わが国のスポーツ体制の根幹や教育制度に関わってくる問題である。選手の側からのデータはとりにくいか、この側面の問題は、もう少しオープンな形で協議していく必要があると思われる。

VI. コーチの現代スポーツ観

コーチをとりまく状況を一言でいえば、ストレスがたいへん高くなっているということである。実際の社会や政治との関わり方が一段といろ濃くなってきた現代スポーツの特徴ともいえよう。ここでは、現代スポーツの理念や現実的な問題について、コーチ自身の認識や評価を明らかにし、指導者の現代スポーツ観からまとめる。

(1)賛成しやすい問題と賛成しにくい問題

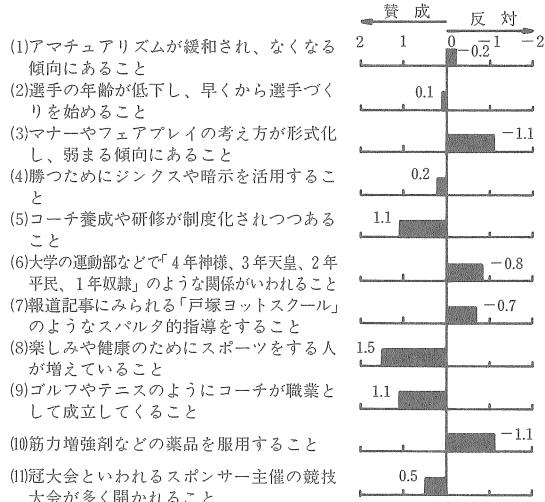
図VI-1は、「(1)アマチュアリズムが緩和され、なくなる傾向にあること」「(2)選手の年齢が低下し、早くから選手づくりを始めること」など11項目にわたって、コーチの認識・評価をまとめている。0の軸からグラフが伸びない項目は、「どちらもいえない」という中間的回答が多いが、賛成と反対の答えが対立してしまうかである。

最も高いスコアは、「楽しみや健康のために、スポーツをする人が増えていること」1.5である。また、「ゴルフやテニスのように、コーチの職業として成立してくること」1.1「コーチ養成や研修が制度化されつつあること」1.1が、高い賛意を示す項目として認められる。内訳をみると、先の2つの項目とも10人中約8人が賛意を示すという結果になっている。スコア1.5のレクリエーションスポーツについての賛意はともかく、コーチの職業化や研修制度の確立などは、これまで見てきた厳しい条件や環境の中でベストを尽そうとするコーチ達

にとって極めて関心が高い問題である。逆に、「マナーやフェアプレイの考え方方が形式化し、弱まる傾向にあること」-1.1や「筋力増強剤などの薬品を服用すること」-1.1などは、コーチ達の10人中7~8人までが反対する。タテマエの答えではなく、これまでのわが国のスポーツ観の継承すべき内容として評価すべきだろう。

これらに比べると、他の項目はコーチの賛否がわかるか、評価しにくいスポーツ観ということになる。「アマチュアリズムが緩和され、なくなる傾向にあること」-0.2の内訳をみると、「どちらともいえない」が49.6%あり、さらに「非常によいこと」2.9%、「よいこと」13.9%、「わるいこと」26.9%、「非常にわるいこと」6.6%という具合にわかってしまう。「選手の年齢が低下し、早くから選手づくりを始めること」の項目では、さらにこの傾向が強まり、コーチの意志は全くまとまらないことが予測される。また「勝つためにジンクスや暗示を活用すること」0.2の場合、「どちらともいえない」が54.7%と多く、賛成と反対は3対1の割合でわかる。

これらに比べると、大学の運動部の問題や、戸塚ヨットスクールにみられたようなスバルタ教育、冠大会の問題などは、「どちらともいえない」



※Q.「わが国スポーツ界の将来を左右する重要な問題や事項をいくつかあげています。あなた自身、今の立場をはなれ次のそれぞれについて、どう思われますか。卒直な考えをお聞かせください。」

図VI-1 コーチの現代スポーツ観

が多いが、賛成、反対の傾向ははっきりしている。これらが、コーチ自身のホンネとタテマエを揺さぶる問題群といってよい。

(2)コーチレベルによるスポーツ観

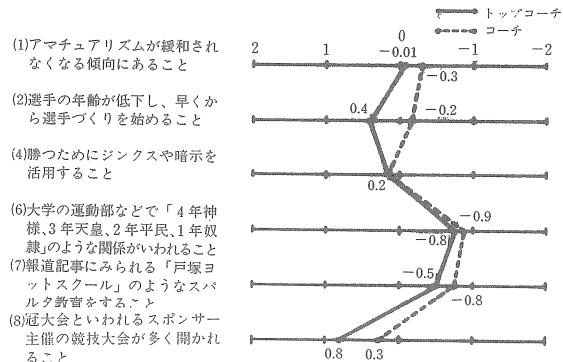
図VI-2は、賛成、反対がわかる項目、賛否を答えにくい項目について、コーチレベルで比較したものである。

6つの項目の中で、トップコーチとコーチの間に比較的差がみられるものは、「選手の年齢が低下し、早くから選手づくりを始めること」でややトップコーチの方に賛意が高い。また「冠大会といわれるスポンサー主催の競技大会が多く開かれること」も、トップコーチの方に賛成の傾向が強い。しかし、他の項目については、コーチのレベルの差はみられない。アマチュアリズム、ジンクス、運動部、スバルタ教育の問題などは、コーチ達が置かれている現状によって差が出るのだろうか、それとも一人ひとりの深いレベルの価値観で規定されるのだろうか。いずれにしても、これらの問題は直接コーチングに関わる内容を含むだけに、コーチ自身によるこれらの問題についての意見交換とある範囲でのコンセンサスを早急にはかる必要があろう。

VII. コーチをやめる理由、続ける意欲

(1)様々な理由からやめる

表VII-1は、一流コーチといわれる人達が、コーチをやめたくなることの有無をまとめている。「あつた」とする割合、「なかつた」とする割合はほぼ半数にわかる。因に、前にとりあげた国体選手の



※ トップコーチは強化コーチをさす

図VI-2 コーチのレベルでみた現代スポーツ観

調査によると、69.4%の者が「やめたいと思ったことがある」ないしは「やめたことがある」と答えてている。選手も指導者も2人に1人は選手生活や指導をやめたいとする危機にみまわれるということになる。

表VII-2は、コーチがやめたいと思う時のその理由をあげている。一つ一つを見ていくと、様々な理由からやめたいことがわかる。の中でも「指導の時間がとれない」16.7%、「自分の時間がとれない」13.1%など生活上の時間的不足の悩み、「人間関係」15.0%、「周りの理解がない」11.8%などいわゆる社会関係に関わる悩みなどの多さが目立ち、先にみた実際の社会生活へのプラスの影響、マイナスの影響とも関わることが多いことがわかる。

(2)コーチを続ける意欲

これまで種々の面にわたって見てきたように、コーチ達は考えている以上に厳しい現実の中で、指導にあたっている。社会生活や政治、経済の影響が強くスポーツの世界に浸透する中で、コーチ一人ひとりの価値観や考えもゆれ動く。コーチをやめる危機とは常に背中あわせにあるといつてもよい。まとめの意味もこめてコーチ自身の満足感とコーチの継続意欲をみてみよう。

図VII-1によると、自分の指導についての評価は

表VII-1 やめたいと思うこと(%)

よくあった	時々あった	あまりなかった	まったくなかった
8.6	40.6	25.7	25.0

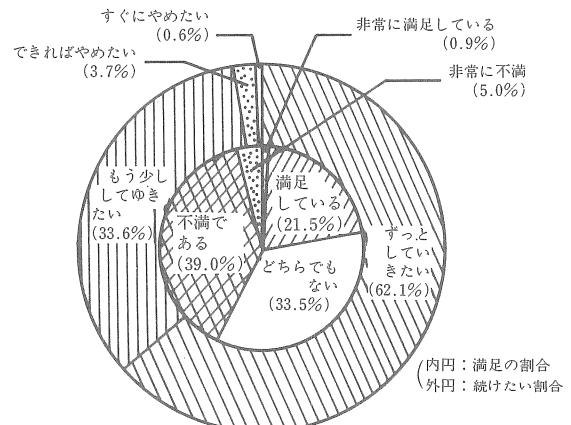
※コーチ全体

※Q.「あなたはこれまでコーチや監督の立場から世話をってきて指導者をやめたいと思ったことがありますか？」

表VII-2 コーチをやめたいとする理由(%)

1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	その他の
が指導され時間のない時間	人間関係	が自分との時間のない時間	が周りの理解	す金がかかる気楽なムード	選手や運営の能力	に自分限界の能力	で施設の利用	健康上	

※コーチ全体



※Q.「あなたは、これまであなた自身の指導自体には満足していますか？」

※Q.「あなたは、これからもコーチとしてスポーツの指導をしてやきたいとお考えですか？」

※コーチ全体

図VII-1 コーチの満足度と意欲(%)

満足、不満足、中間的回答がほぼ1/3づつに分かれている(円内)。やや満足層が少ないとえようか。

今後の意欲をみると、「ずっとしてやきたい」が62.1%、「もう少ししてやきたい」が33.6%となり、大部分のコーチ達は継続する意欲があるとみなされる。自分自身の指導についての評価はわかるが、これからも続けるという強い意欲は共通してあるものと理解できる。コーチになるはじめの理由でみた素朴ともいえるエネルギーと、ここでみたコーチの継続意欲はどこか太くつながっているのだろう。スポーツの世界の外からの圧力が高まるスポーツ情況の中で、コーチ自身、また選手自身の側から考え、構想する条件づくり、環境づくりのプログラムが望まれる。

VIII. 一流コーチのキャリア・パターン

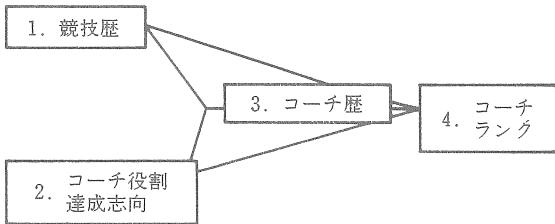
〈パス解析を用いた分析的研究報告〉

ここでは、取り扱う要因を定量的に処理・解析する方法を用いて、一流コーチを規定する要因を明らかにし、そして“一流コーチ”という地位を獲得するまでのキャリア・パターンをモデル化し検討することにした。

一流コーチと、一口に言っても、その定義ははなはだ難しいと言わざるを得ないが、ここでは次のようなモデルを想定した。すなわち、競技歴(競技成績)が高いレベルに位置し、さらにコーチと

いう役割に対する達成志向度が高い者が、コーチに就任し、そしてコーチ成績に良い結果を達成した者が、より高いレベルにある選手を指導すると想定したわけである。

したがって、解析に用いた変数は1~4の要因に関連が深いと考えられるものを選出した（図VIII-1参照）。



図VIII-1 一流コーチのキャリア・パターンモデル

表VIII-1には、27変数間の相関係数マトリックスを示した。主対角線の右上半分は相関係数で、左下半分はそれぞれの対のケース数を示してある。この表に並べられた変数のうち、 X_{10} （初めてコーチに就任した時の指導担当レベル）、 X_{11} （公認コーチに就任した時の指導担当レベル）、 X_{25} （コーチランク）が目的変数であることに着目しながら、この表を読んでみる。

まず X_{10} と強い相関関係にある変数は、 X_6 、 X_7 、 X_{11} 、 X_{12} 、 X_{22} 、 X_{23} 、 X_{24} 、 X_{25} 、 X_{26} であるが、説明変数としては、 X_6 （競技成績）と X_7 （代表・選抜レベル）の2変数が考えられる。さらに相関係数は低いものの社会的背景や競技年数、指導を受けた年数なども考慮する必要があろう。

次いで、 X_{11} についてみると、 X_6 、 X_7 、 X_{10} 、 X_{12} 、 X_{22} 、 X_{23} 、 X_{24} 、 X_{25} と関連が深いことがわかるが、先の X_{10} の場合と同様に説明変数としては、 X_6 、 X_7 、 X_{10} が考えられ、さらに社会的背景、競技年数、指導年数を加えて検討する余地がある。

コーチランクと相関関係が強い変数は、 X_6 、 X_7 、 X_{10} 、 X_{11} 、 X_{12} 、 X_{22} 、 X_{23} 、 X_{24} である。

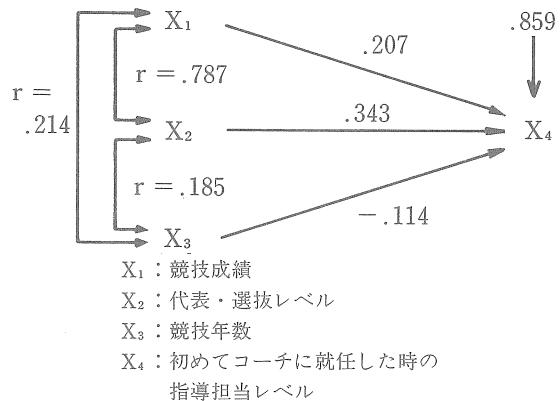
以上のように相関マトリックスから検討してみると、図VIII-1に示したコーチ役割達成志向という要因群（ $X_{13} \sim X_{17}$ ）が、いずれのケースでもキャリア・パターンには全く関連性がなく、コーチのキャリア・パターンは競技成績の良し悪しに左右されていると推察される。

実際にパス解析によって処理した結果を示す前に、ここで、予備的知識として社会階層と社会移動について触ることにする。一般に、収入、職業、階層意識などは、父母の学歴、本人の学歴、父の職業、本人の教育達成志向や職業達成志向などによって説明される。また転職に際しては、前職や学歴という要因が影響を及ぼす。これらの社会的地位の上昇・下降に際しては、それまでの地位や学歴が直接的に影響を及ぼし、社会的背景（例えば父の学歴や職業など）は直接的効果因子を媒介して間接的に効いてくるのである。

そこで、コーチの地位や移動を前述の社会階層と社会移動として捉えると、コーチの競技成績やコーチ成績がどのように関係し合い、影響し合っているかを知ることが可能となり、コーチのキャリア・パターンを分析することも可能となる。すなわち、コーチランクを職業、ランクの移動を転職、競技成績やコーチ成績を学歴、コーチ役割への達成志向を教育や職業への達成志向といった具合に置き換えて考えられるのである。

(1) 初めてコーチに就任した時の指導担当レベルの分析

図VIII-2は、初めてコーチに就任した時の指導担当レベルを目的変数とした場合のパス・ダイアグラムである。パス係数からも明らかのように、初めて指導する選手の競技レベルは、競技成績と代表・選抜レベルが高いほど、高いレベルを受け持つことがわかる（ $P_{14} = .207$ 、 $P_{24} = .343$ ）。また競技成績と代表・選抜レベルは相関係数が $r_{12} = .787$ と高いことから、ほとんど同じ要因であることも



図VIII-2 パス・ダイアグラム-1 (n=419)

表VIII-1 相関マトリックス

	X 1	X 2	X 3	X 4	X 5	X 6	X 7	X 8	X 9	X 10	X 11	X 12	X 13	X 14	X 15	X 16	X 17	X 18	X 19	X 20	X 21	X 22	X 23	X 24	X 25	X 26	X 27	
X 1 年齢	-.152	.087	.105	.100	-.103	-.050	.057	-.057	-.106	.034	.016	.029	.055	.071	-.117	.096	.033	.690	.307	.586	.106	.010	-.029	.052	.109	.082		
X 2 学年	511	.116	.142	.227	.094	.006	-.037	-.009	.043	.142	.121	-.030	-.134	-.102	-.020	-.043	.020	.036	-.040	.046	.124	.019	.090	.111	.097	.057		
X 3 父子歴	511	513	419	.033	.030	.022	-.032	-.073	.027	.033	.043	.045	.102	.110	-.000	-.021	-.028	.125	.076	.071	.052	-.020	.009	.066	.024	.044		
X 4 父職業	484	484	471	.092	.032	.024	-.103	-.098	-.037	-.005	.003	.071	.027	.039	-.028	-.023	.038	.122	.030	.092	.036	-.015	.035	.071	.003	.038		
X 5 職業	542	539	499	473	.041	.006	-.003	-.002	-.014	.070	.109	-.013	-.031	-.110	-.038	-.014	.016	.187	.136	.084	.123	.010	.134	.074	.123	.034		
X 6 婦歩成績	528	525	490	494	.515	.797	.185	.285	.441	.466	.514	-.145	-.075	-.012	.068	-.019	.115	-.219	.060	-.282	.471	.341	.505	.419	.053	-.052		
X 7 代表・選抜レベル	456	453	421	400	444	446	.180	.283	.499	.484	.513	-.188	-.135	-.005	.079	-.012	.102	-.204	.023	-.237	.467	.400	.531	.443	-.020	-.072		
X 8 錦技年数	537	534	496	498	.525	518	.446		.372	-.053	-.050	-.077	-.184	-.156	-.085	.071	-.138	.071	.002	.081	-.024	-.060	-.078	-.033	-.032	-.012	-.015	
X 9 指導を受けた年数	493	491	456	433	483	473	403	491	.147	.117	.075	-.137	-.009	-.050	.080	-.030	.066	-.176	-.049	-.147	.059	.101	.057	.126	-.063	-.153		
X 10 他のコーチに接続した年数	535	531	495	468	524	509	441	524	480	.633	.508	-.071	.025	.076	.094	-.010	.044	-.221	-.012	-.258	.518	.592	.556	.458	-.490	-.254		
X 11 公認コーチに接続した年数	531	527	492	427	520	505	.436	.520	.477	.534		.744	-.066	-.074	-.088	.018	.041	.066	-.004	-.001	-.031	.718	.503	.712	.525	.088	.016	
X 12 推奨点の指導	520	517	481	457	510	494	428	507	.468	.521	.522		-.053	-.136	.013	.036	.015	.144	-.050	.018	-.082	.782	.501	.777	.599	.460	.105	
X 13 球場の活用意欲	321	517	480	453	509	498	430	507	.465	.510	.506	.496		.481	.420	-.223	.083	.014	-.001	-.051	.016	-.028	-.024	-.018	-.043	.015	-.003	
X 14 選手育成意欲	529	525	486	462	518	504	.436	.514	.473	.517	.515	.504	.521		.502	-.295	.177	-.067	-.037	-.048	-.042	-.100	-.015	-.005	-.109	-.153	-.064	
X 15 指導者就任意欲	515	511	474	450	505	493	.427	.500	.459	.503	.500	.489	.516	.517		-.367	.186	-.047	-.067	-.096	-.025	.020	.035	.001	.044	-.066	-.027	
X 16 コーチの理想像	555	551	511	484	543	528	.457	.540	.497	.540	.536	.525	.524		.532	.518		-.204	.019	-.103	.015	-.110	-.004	.051	.029	.018	-.049	-.042
X 17 モデル・コーチ	542	538	499	472	530	515	.445	.528	.486	.528	.514	.513	.522		.508	.548		-.114	.033	-.022	.033	.007	-.004	.001	-.034	-.039	.035	
X 18 試合総同日数	540	446	414	393	437	428	370	438	403	441	438	429	437	427	454	445		-.011	.067	.055	.150	.089	.064	.001	.044	-.066	-.027	
X 19 コーチ総年数	545	543	504	477	534	519	451	530	488	531	527	515	515	524	510	551	538	446		.402	.815	.074	-.164	-.123	-.055	.163	.219	
X 20 公認コーチ年数	522	518	481	460	509	495	429	506	467	506	507	496	492	499	488	526	516	431	523		-.202	.115	.004	-.017	.077	.025	.079	
X 21 公認コーチ就任歴	519	515	479	456	506	492	428	503	464	504	505	493	490	498	487	523	513	429	523		-.017	-.194	-.156	-.126	-.180	.188		
X 22 推奨担当最高レベル	546	542	503	476	535	519	449	531	489	532	528	519	516	524	510	551	538	446	541	516	513		.443	.694	.553	.230	.201	
X 23 推奨担当最低レベル	534	530	492	464	525	528	439	520	478	521	517	509	510	514	501	539	528	439	530	505	502	539		.537	.470	-.127	-.394	
X 24 過去の主な指導	497	494	457	433	488	474	409	485	446	487	483	479	477	482	469	502	492	420	494	473	470	501	498		.616	-.184	-.026	
X 25 コーチ・ランク	551	546	506	480	537	524	451	535	492	533	529	518	517	525	512	553	541	450	543	521	518	544	532	497		.063	-.176	
X 26 コーチ・ランク	515	512	478	454	505	489	424	504	464	521	520	521	492	500	486	520	509	434	511	492	490	514	504	474	513		.393	
X 27 レベルアッパー	489	486	453	425	479	465	405	477	438	479	474	469	461	494	484	410	485	464	461	494	490	471	488	465				

右上半分：相関係数
+ve +ve

わかる。一方、競技年数は、マイナス要因として働く ($P_{34} = -.114$)。このことは競技年数が長いほど、指導担当レベルは低いことを意味するが、無視してよい程度の値である。

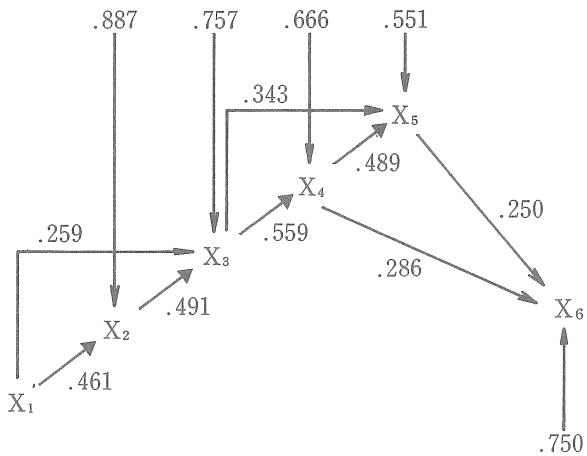
(2) 公認コーチに就任した時の指導担当レベルの分析

次に、公認コーチに就任した時の指導担当レベルについて分析したものを見図VIII-3に示した。初めてコーチに就任した時の指導担当レベルと公認コーチに就任した時の指導担当レベルの間には、 $P_{35} = .529$ と非常に高い数値があり、このことは、コーチの地位移動が固定化していると考えられる。また、競技成績と代表・選抜レベルからの直接的影響は、それぞれ $P_{15} = .137$, $P_{25} = .117$ と弱く、むしろ $P_{13} = .203$, $P_{23} = .331$ が示すように、 X_3 (初めてコーチに就任した時の指導担当レベル) を経由して間接的に効いているといえよう。

(3) コーチランクの分析

図VIII-4および図VIII-5は、現在の地位であるコーチランク (強化コーチ、ジュニアコーチ、上級コーチ、コーチ) について解析したものである。図VIII-4では、過去の主たる指導担当レベルという変数を組み入れてあるが、 $P_{46} = .286$, $P_{56} = .250$ が示す通り、現在の地位は、過去の主たる指導担当レ

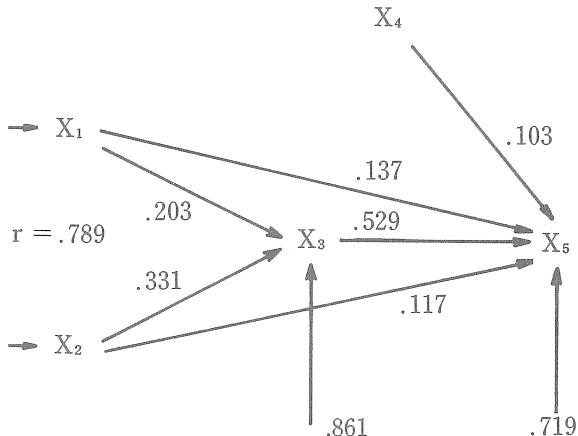
ベルと現時点の指導担当レベルによって決定されていることがわかる。また、 $P_{12} = .461$, $P_{23} = .491$, $P_{34} = .559$, $P_{45} = .489$ が示すように鎖型のパス・ダイアグラムとなり、このことは各ステップがその前ステップによって決定されることを意味している。したがって、競技成績が高い者ほど、競技レベルの高い選手を指導することになる。



X₁ : 競技成績

- X₂ : 初めてコーチに就任した時の指導担当レベル
- X₃ : 公認コーチに就任した時の指導担当レベル
- X₄ : 過去の主たる指導担当レベル
- X₅ : 現時点での指導担当レベル
- X₆ : コーチランク

図VIII-4 パス・ダイアグラム-3 (n=438)



X₁ : 競技成績

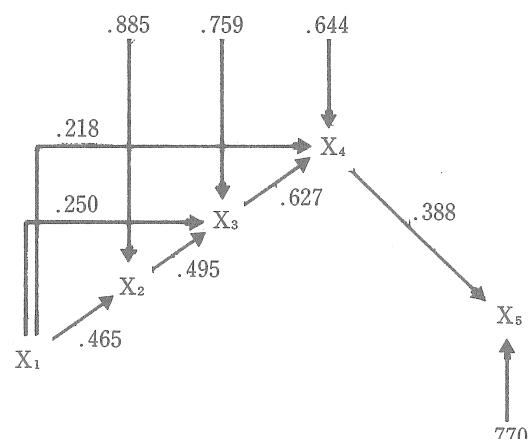
X₂ : 代表・選抜レベル

X₃ : 初めてコーチに就任した時の指導担当レベル

X₄ : 学歴

X₅ : 公認コーチに就任した時の指導担当レベル

図VIII-3 パス・ダイアグラム-2 (n=415)



X₁ : 競技成績

X₂ : 初めてコーチに就任した時の指導担当レベル

X₃ : 公認コーチに就任した時の指導担当レベル

X₄ : 現時点での指導担当レベル

X₅ : コーチランク

図VIII-5 パス・ダイアグラム-4 (n=481)

図VIII-5でも同じ結果を得たが、とりわけ X_1 は、 $P_{12} = .465$, $P_{13} = .250$, $P_{14} = .218$ と広範に影響を及ぼしていることがわかる。また $P_{34} = .627$ は非常に高い数値を示しており、このことは、公認コーチとして就任した時の指導担当レベルと現時点の指導担当レベルが、ほとんど変わらないことを意味している。

(4) まとめ

- ① 現在のコーチランク（強化コーチ、ジュニアコーチ、上級コーチ、コーチ）という社会的地位は、現在や過去の主たる指導担当選手の競技レベルによって決定される。
- ② 指導担当レベルは、かなり固定化しており、このレベルの高低は、コーチ自身が現役競技選手当時の競技成績の高低によって決定される。すなわち、インター・ナショナル・レベルにある選手を指導するコーチはコーチ自身がかつてそのレベルの選手であった者が多くなることになる
- ③ したがって、コーチの地位（指導担当レベ

ルやコーチランク）は、前地位によって決定される、直線的なキャリア・パターンをたどる。

- ④ コーチ役割への達成志向は、指導担当レベルに関与しない。
- ⑤ 選手の成績を向上させたり、競技レベルを向上させるという要因は、指導担当レベルが高いほど難しく、低いほどその機会に恵まれると考えられるが、このような要因は、コーチの地位変動に強く関与しない。

参考・引用文献

- 1) 東川安雄・荒井貞光「選手と指導者の関係についての社会的研究、一特にジュニア選手からみた望みと現実の差を中心に」昭和57年度・日本体育協会スポーツ医・科学報告、No.1 女子のスポーツ適性に関する研究—第2報—、130—133
- 2) 荒井貞光「スポーツ集団の空間構成に関する社会学的研究」体育学研究29巻1号、1-13 1984.

その2 一流コーチの社会的背景と意識に関する面接調査

報告者 条野 豊 田 中 鎮 雄 佐 伯 聰 夫 永 島 慎 正
鈴木 守 生 沼 芳 弘 古 屋 正 俊 橋 本 純 一

◇はじめに

面接調査は、次の3つの部分に分けて実施した。

1. 國際的一流選手を育てた一流コーチについて
 2. 日本体育協会が海外に派遣しているコーチのみた海外事情について
 3. 体協記者クラブのみた日本のコーチについて
- 面接にあたってご協力をいただくのは次の方々である。

1. 國際的一流選手を育てた一流コーチ

(1)個人種目

コーチ名	種 目	育てた選手
阿部 和雄	体 操	具志堅幸司
塚原千恵子	"	森尾麻依子
鶴峰 治	水 泳	高橋 繁浩
渡辺 敏夫	"	長崎 宏子
井村 雅代	シンクロナ イズドスイ ミング	元好三和子
佐藤 宣践	柔 道	山下 泰裕
中村 良三	"	山口 香
滝田 詔夫	マラソン	増田明美

(2)団体種目

松平 康隆	バレー ボール	ミュンヘンオリンピック 男子チーム（3位）
山田 重雄	"	日本女子バレー ボール 総監督
岡野俊一郎	サッカー	メキシコオリンピック第 3位

2. 海外派遣コーチ意見聴取者

氏 名	種 目	派 遣 先
田口 信教	水 泳	アメリカ, インディアナ 州立大学
古沢 久雄	バレー ボール	ブルガリア, バレーボー ル連盟ソフィア体育大学
富安 一郎	近代五種	アメリカ, テキサス州近 代五種トレーニングセン ター
本田 宗洋	カヌー	西ドイツ・スポーツシュー レカヌー・スポーツセ ンター
藤沢 義彦	フェン シング	フランス, 国立スポーツ 研究所

3. 記者クラブ意見聴取者

大高 宏元	（朝日新聞運動部）
大谷 直樹	（毎日新聞運動部）
宮永 民男	（共同通信社運動部）
奥本 浩平	（報知新聞運動部）
黒木 博一	（日刊スポーツ新聞社運動部）

◇面接結果の概要

1. 國際的一流選手を育てた一流コーチ、2. 海外派遣コーチのみた海外の事情、3. 記者クラブの人たちのみた日本のコーチについての、それぞれの具体的な内容については以下に詳述するが、これらの内容を概括してみると次のようにまとめることができる。

1. コーチのタイプ

一般に、個人種目のコーチは「ジャングルファイター」或は「クラフツマン」的指導者のタイプが多く、団体種目では、「ゲームズマン」的指導者のタイプが多いようである。それに比して、中間的なレベルのコーチ（アンケート調査結果参照）は、「カンパニーマン」的指導者のタイプが多いのではないか。

「ジャングル・ファイター」とは、一匹狼的タイプ=千万人といえどもわれ行かんタイプでゴッドファーザー的存在。「クラフツマン」は、研究者的タイプでこつこつとよく勉強し、あることに没頭するタイプ。「ゲームズマン」は、1人ひとりの特性を生かし、チームとしてあることに挑戦していくタイプ。「カンパニーマン」は、組織の中間リーダーとして、組織に忠実に生き、部下にあることを強く求めていくタイプ。

2. 一流コーチの社会的特性

面接対象となった一流コーチは、記者クラブの人たちのみた日本の一般的のコーチ像に比べて、さすがに一段とすぐれた指導者であることが伺えた。面接結果の主な特徴をあげてみると次の諸点をあげることができる。

- (1) コーチについての勉強…情報を取り広く取

集しており、よく勉強している。

- (2) 選手への対応…一般にそれぞれ自分自身の信念に基づいて指導しているが、その対応のしかたは多様である。よい指導者は対象に合わせて自分をいろいろに変えていくことができるからであろう。
- (3) コーチの社会的背景では、一般に、スポーツ環境に恵まれている人が多い。
- (4) 選手との出会い…個人種目は、一般に、学校やクラブでの「偶然の出会い」或は「依頼」による出会いが多い。それに比べて団体種目は「勧誘」によるものが多いようである。
- (5) 選手との結びつき…相互信頼がとくに強い。しかし日常生活も含めて、べったり型は少ない。とくに選手の私生活にはあまり立ち入らないように心がけているようである。
- (6) 経済的結びつき…選手との経済的結びつきはあまりみられない。しかし、時間・経済面での自己犠牲は大きい。
- (7) 選手の養成費…一般に、後援会、組織からの援助、クラブ・学校からの援助が主で、個人負担は殆んどない。
- (8) コーチにとっての選手、選手にとってのコーチ…コーチにとっては、選手は自分の夢を托し、生きがいそのもの。選手にとってのコーチは、選手生活の環境、条件をつくる上での必要不可欠な存在。
- (9) 一流選手が育つのは…単一要素ではない。才能、組織、コーチ、運、努力などの函数関係が重要でないか。
- (10) 理想のコーチ像…思ったことが言えるコーチ、様々なものを取り入れることのできる柔軟なコーチ。
- (11) コーチシステムの再検討について…①小・中・高・大学、クラブの一貫性、②情報交換の場、③社会的、経済的保証。でないと、現在のままでは、利口なコーチは離れていくのではないか。

3. 海外派遣の一流コーチのみたコーチ問題

一般に、諸外国のコーチは、制度的にも、また、

給与面でも保証されており、コーチの組織的チームワークとその科学性にみるべきものがある。それに比べて、日本のコーチ制度は組織面でも給与面でも不充分である。とくにコーチの群雄割拠が問題である。

4. 記者クラブのみた日本の一般的コーチ事情

- (1) 選手発掘の学校依存と学校運動部の閉鎖性が問題。
- (2) よいコーチは、ものの考え方の根本を教え授けることのできる指導者でなければならない。
- (3) 選手も、コーチも、練習にもっと創意工夫が必要ではないか。“量より質の時代”への発想の転換が必要ではないか。
- (4) コーチと選手の結びつきの改善…上下関係が強すぎる。コーチと選手、選手同志のディスカッションができる場があつてよいのではないか。
- (5) 欧米では、コーチングのプロジェクトチームができている。日本は閉鎖的ではないか。
- (6) コーチの社会的評価が低い。これが裏目に出てしまっていないか。欧米では、コーチは選手に対しては①だが、社会的評価は高い。日本のコーチは、選手に対して①だが、社会的評価が低い。この辺を変えていかなければならないのではないか。
- (7) コーチの社会的、経済的裏付けの保証が必要ではないか。
- (8) スポーツの科学的研究と実際のコーチングの接点をはかる必要がある。
- (9) 選手養成の社会的条件づくりとして、とくにそのシステム、施設のあり方、などの再検討が必要。
- (10) スポーツの社会的意義の認め方が、わが国では、教育の枠組内で考えられる傾向にある。もっと政治、経済、文化といった広い立場に立った考え方が必要ではないか。この辺が日本のスポーツの底の浅さといってよいのではないか。

1. 個人種目について

(1) 全体的まとめ 面接結果の内容を、その対象者別に表示すると次のとおりである。

内 容	1. 役割取得に関する社会的条件			2. 役割遂行の経済的・物質的条件				
	面接者	(1)家族の影響 (2)集団や組織の影響 影響を受けた指導者	(3)コーチになろうとした、きっかけ	(4)役割取得に影響した人間関係	(5)役割の維持と発展に影響する人間関係	(1)コーチとして消費する時間・金銭	(2)それについての援助	(3)自己犠牲の程度とその報酬の内容
器械体操(男) 阿 部 和 雄	両親の理解	学生時代のクラブの民主的雰囲気	指導者不足のため、大学残留の要請を受けて	スポーツ関係の先輩 恩師	ドイツ留学時代の体操仲間	余暇のすべてと生活費以外の金銭(独身時代)	初期にはなし、今は体協や体操協会から援助	家庭が犠牲性、OBや後輩が援助してくれる
器械体操(女) 塚 原 千恵子	父親の理解と奨励	高校時代の民主的な育児時間の必要性、体操界の低年齢化に對処	主人(同種目のコーチ)	主人(同種目のコーチ)	シーザン中は毎日、オフは週一日	会社からの給与	自分のためと思って納得	主人、教えることの充実感
シンクロナイズドスイミング 井 村 雅 代	母親の理解と勧め	浜寺水練学校	コーチ不足、自分が立つ	いなし、	毎日	必要経費は浜寺水練学校から	主人、教えることの充実感	家庭。選手が人間的にも育つこと
水 泳(男) 鶴 峰 治	兄弟全員がスポーツを実施	中学教師(水泳選手) 自衛隊の心理學教育官	東京オリンピック後 に日本代表の自分の責任と考え	大学時代の恩師と後輩	すべての時間、金銭的には大赤字	仕事、金銭的にはなし	仕事、金銭的にはなし	榮誉あること。やらねばならないこと
水 (女) 渡 辺 敏 夫		いなし、(会社設立と一緒に入社した)	多方面のコーチになつてから、企業の方針で			生活すべてが闘争している	大学	時間面だけある
柔 佐 道(男) 藤 宣 践	家族全員がスポーツ	教育大のコーチ	学生時代に母校のコーチをしてから	松平康隆、川上哲治 広瀬達明	生活している	給与以外の自分の収入を充てる	家庭。仕事であり、生きがい、	時間面だけある
柔 佐 道(女) 中 村 良 三	特になし	中学・高校の柔道部の教師	柔道関係者のみ	中学時代の柔道部教師	一日の大部分	給与以外の自分の収入を充てる	家庭。仕事であり、生きがい、	そういう意識はない
レスリング 富 山 英 明	全員の理解と奨励	高校時代の監督	高校時代の監督	大学時代の先輩・後輩・OB	かなりの時間、かなりの金額	時間的犠牲が大、経済的にも赤字	特になし	良い選手が育つこと
マラソン(女) 滝 田 詔 夫	病弱のため、反対された		高校卒業後、残るこ	高校時代の恩師		なし		
ま ま と め	両親の理解、スポーツに肯定的な家族の零園気など	自分が所属したクラブや、そこでの指導者の影響	(同種目の影響)	スポーツ関係者、特に直系の父關係者(同種目の影響)	勤務時間との区別が不明確だが、多くの時間が割かれている	純粋な必要経費は支給されている	純粋な必要経費は支給されている	家庭が犠牲性になる。報酬として具体的なものがはてこない、精神的自己満足に自分から楽しむねばならない、

内 容 面 構 者	3 . 精神的信条と価値観			4 . 選手との関わり方			
	(1)日常生活のモットー	(2)指導のモットー	(3)指導に全力を尽くす理由	(1)出会い、 選手が好きを感ずる	(2)可能性の発見、 個人的にあずかってい たう中の一人	(3)時間的結びつき 練習時間以外は、つき あわない、	(4)経済的な関係
器 機 体 操(男) 阿 部 和 雄	仕事に責任をもつ 家庭生活を守る	選手の主体性の尊重	体操が好き 指導に喜びを感じる	選手が入学してクラブ に入ったので	大学3年時のケガ 一語、それ以外に話し をすることがある	スポーツ場面では常に 個人的援助なし	
器 機 体 操(女) 塙 原 千恵子		選手の自主性の重視	体操が好き				
シングルナイズド スイミング 井 伸 幸	中途半端にしない	強くなろうと思え る	やる価値がある 自分のためと思ってや る				
水 泳(男) 鶴 峰 治		私生活に気をつける					
水 泳(女) 渡 辺 敏 夫	一日一日を大切に	健 康 面 の 留 意					
柔 道(男) 佐 佐 藤 宣 践	「力めれば立つ」 「力必立」	力必立、文武両道、 一期一会、一戦入魂	柔道が好き 柔道への恩がえし	スポーツクラブ入会 意図的	5年生の終わりから、 大会を重ねるうちに確 信	クラブだけ	個人的援助なし
柔 道(女) 中 村 良 三	なし	すべてのことにはんぱ する	わからない そういうものだと思っ てている	意図的に獲得 選手が自ら志望した	出会って一ヶ月後、遠 征時の集中力をみて	9~10ヶ月月は一緒に	
レスリング 富 山 英 明	時間を大切に 集中して発散	課題をもって練習に臨 む	後輩の育成	部の中で出会った	高2の世界選手権をみ て	柔道の場ではすべて	
マ ラ ソン(女) 瀧 田 詔 夫	どのような訓練を受け ようとも心動かす	子どもたちをみながら 一緒にやっていくこと			大学入学当時から	24時間いつも一緒に (合宿形態のため)	若干、ポケットマネー で補うこともある
ま と め							

金銭的援助は殆んどあ
り得ない。ただし手の負担を減らすため
スポーツでもプライベー
トタイムでは一緒に接觸を避
けている。

内 容		4. 選手との関わり方					
面接者	（5）他のコーチ・選手との関係	（6）他の職場の人との関係	（7）練習・試合・合宿計画	（8）リーダーシップのタイプ	（9）選手の生活管理	（10）人間形成への配慮	
器 機 体 操(男) 阿 部 和 雄	平等で民主的		選手が立案したものをチ ェック	サポーター型・科学型	選手任せ		
器 機 体 操(女) 塙 原 千恵子	対等		コーチが立案	サポーター型・信念型	全般的に配慮し、管理す る	集中力の育成に注意 普通の社会人であるよう に	
シングロナライズド スイミング 井 村 雅 代	平等、チームの中の一人		コーチがすべて決める	トップレベルには科学型 低いレベルには信念型	シンクロ以外は本人任せ	冷たく感動しない選手に ならなくなつたのではなく、 強で強を教えたいたい こと	
水 泳(男) 鶴 峰 治	平等、協力的		監督、コーチが決定	カリスマ型、信念型	トップスマイマーとしての 責任を自覚させる管理		
水 泳(女) 渡 辺 敏 夫	平等、グループの一員		コーチが作成	サポーター型、なんでも 屋	私生活にはノータッチ		
柔 道(男) 佐 藤 宣 践	特に感することはない		コーチが決定	自分がいなくても成果の できるような指導	最低限度以外は自由	文武の文を教えたい	
柔 道(女) 中 村 良 三	一人しかいないので多少 は別に扱わざるを得ない		自分で作る		こちらから生活に特をは めることはない		
レスリング 富 山 美 明	平等		すべて自分が決定	信念型	コンディショニングと礼 儀、特に生活態度	必要なこと	
マラソン(女) 滝 田 詔 夫			選手が立案し、それにア ドバイスを加える	サポーター型		配慮している。成田山の 高僧を招いて講話しても らう	
ま と め	平等と答えたものが多い		大部分は、大会等のスケ ジュールを立てる修正してい く。 でコートながら実践してい く。		最低限の注意を除けば私は 生活へのコントロールは あまりない。	何がしかの配慮が必要と 考えているようだ。	

内 容		5. コーチの役割意識について		
面 接 者	(1)長所・短所	(2)選手をうけもつてから練習法や戦法をかえたか	(3)コーチングの勉強	(4)世界のトップレベルへの確信
器械体操(男) 阿 部 和 雄	相手の立場を尊重 性格的に弱い	ケガの後は、良いところを伸ばすようにした	方法論が大切	共に考えて解決していく
器械体操(女) 塙 原 千恵子	しつこい、真面目、休まない 気が短かい、	すべて変わった	著明な指導者の指導哲学の著書 を読む	ぎりぎりまでだまつて待つ
シンクロナイズド スイミング 井 雅 代	最後まで面倒を見る 言いたらきかない	特に変わらない、他の人と同じ		楽観的に次の策を練る
水 泳(男) 鶴 峰 治	話が長いこと	少ない練習で最大の効果が得られるようになってきた	役立つものは何でも	悲観的にならず、選手を信じて 引っぱっていく
水 泳(女) 渡 辺 敏 夫	おく手で慎重	別に変化なし	合宿などでのコーチとのディス カッション	わからない
柔 道(男) 佐 佐 宣 践	しつこくて、粘り強い、	筋トレの導入・演技の指導	大会を重ねつつ	
柔 道(女) 中 村 良 三	いろいろ思いついて工夫するこ とあきっぽくなってきた	全体会の練習はかわらない、これ から少し変わらんだろう	許す限りどんどん欲に吸収	選手が低迷期から抜けれるのを待 つ
レスリング 富 山 英 明	自分の持っているものに自信を もつている 短気で先走りの傾向がある		減量と準備運動が中心	
マラソン(女) 滝 田 詔 夫				
ま と め		選手個人に対しての方法の変化 はみられる		

内 容		6. その他			
面接者		(1)日本のコーチシステムについて	(2)国や体協への意見	(3)選手補充の方法	(4)引退の際の配慮
器 機 体 操(男) 阿 部 和 雄	指導者養成の問題が今後の課題				方法論の知識。子どもの尊重
器 機 体 操(女) 塙 原 千 恵 子	一流コーチとは何なのか 一流選手を育てた人のかか	特別なものはない、			現場で毎日選手と一緒にいること
シングロナイスド スイミング 井 村 雅 代	コーチを社会的に保障してほしい	浜寺水練学校の中からみつける	シンクロに貢献してほしい	耐えること、待つこと、選手に信用されること、ひきつけること	互いに考える関係。選手の主体性を認めること
水 泳(男) 鶴 峰 治	コーチへの社会的・経済的保障がほしい	体育省の設置	下の年齢の者からじっくりやりやるだけ	引退後の保障や配慮がない	朝早くおきれること
水 泳(女) 渡 辺 敏 夫	コーチ資格が生かされていない、研修システムの生かし方が重要			自分のできる枠内で援助する。一流選手の生きかし方があるはず	情熱
柔 道(男) 佐 藤 宣 践	コーチへの金銭的な配慮がほしい		個人の力でつれてくる	相談にはのるが決めるのは本人	性格的に粘り強いこと
柔 道(女) 中 村 良 三		強化のためには国家の援助は不可欠		女子柔道に貢献してもらいたい、	マネジメントと現場指導の両方のできるコーチ
レスリング 富 山 英 明		経済的援助がほしい	勧誘はしている	いい選手がいて充分な金があり、やりたいことをやらせてもらえばいい、	決められない
マラソン(女) 滝 田 詔 夫	特に考えていない。現状では多少のことといったのも実現しないだろう		監督やコーチにはこんだ選手がくることが望ましい、		情熱
ま と め	指導者養成と社会的・経済的保障の必要性	金銭的援助			各自が何らかの確たるものを持つている

内 容		6 . その他	
面 接 者	(7)一流コーチになる条件	(8)選手の一時的移動	(9)コーチにとって選手とは
器械機体操(男) 阿 部 和 雄	優秀な選手との偶然の出会い、	なかなかむずかしい。すぐには手が出せない、	生きがい、自分の生きがいに近い、
器械機体操(女) 塙 原 千恵子	素質をもった選手の発見と出会い。コーチとしての努力	心地的にはいいやだ。かまわないと思うが	自分の生きがいに近い、
シンクロナイズドミネス(女) 井 村 雅 代	本人の努力、組織、才能、運、出会い、	いいことである	やりがいのある相手
水 泳(男) 鶴 峰 治	優秀な選手との出会い、	信頼できれば良い	貴重品
水 泳(女) 渡 辺 敏 夫	才能との出会い、		
柔 道(男) 佐 藤 宣 践	自分の才能・努力、次に良い組織・選手・運	低レベルでは指導の一慣性がなくなり不可、上級者には可	自分の夢をたくした子どものようなもの
柔 道(女) 中 村 良 三	選手時代の実績とコーチになつてから努力	良いことだ	特に気負った考えはない、
レスリング 富 山 英 明	才能・選手との出会い、良い組織・運		良き仲間・良きライバル
マラソン(女) 瀧 田 詔 夫	一生懸命にやることと、こつこつと積み重ねること		
ま と め	才能との出会いなのか、そもそもはあくまで本人の能力・努力の結果であるかのどちらか。	肯定的意見が多い、	心情的に貴重なウエイトを占めている

(2) 面接対象別面接内容

I . 器械体操

〔コーチ：阿部和雄〕

1 . 役割取得に関する社会的条件

(1) 家族の影響

両親（教師）はスポーツ経験者で、スポーツに理解が深い。特に奨励はされないが自分の好きなスポーツができる環境であった。

(2) 集団や組織の影響

学生時代に所属していた体操クラブの民主的な雰囲気が良く、また、良い先輩が数多くいたことなどの影響が大きい。

(3) コーチになろうとした契機

学生時代はクラブに指導者が不在であり、先輩が後輩の指導をしていた。こういう状況の中、大学卒業後に大学へ残るようにとの要請があったので。

(4) 役割取得に影響を及ぼした人間関係

数多くの先輩や恩師の方々（主にスポーツ）

(5) 役割維持に影響を及ぼした人間関係

ドイツ留学時代の体操仲間とのつき合い。

2 . 役割遂行の経済的・物質的条件

(1) コーチとして働く時間・金銭

独身時代は余暇のすべてを費し、金銭的にも生活費以外は殆んど費した。

(2) 援助や配慮等の有無

コーチ就任初期は殆んどなかったが、最近では体操協会・体協から援助が出るようになった。

(3) 自己犠牲の程度と報酬の内容

家庭を顧みることができないという点が大きいのではないか（離婚経験あり）。報酬としては全国的なO Bや後輩などの援助。

3 . 精神的信条と価値観

(1) 日常生活のモットー

仕事に責任をもつこと、家庭の生活は守ることの2つであり、これらはすべて生活経験の中から生まれたものである。

(2) スポーツ指導のモットー

選手を十分納得させてから行動させること。つまり選手の主体性を尊重することである。

(3) スポーツ指導に全力を尽くす理由

体操が好きであること。更に学生たちを援助できる喜びを感じるからである。

4 . 選手との関わり方（具志堅選手との）

(1) 出会い

具志堅の大学入学後、クラブ員とコーチとして出会った。

(2) 可能性の発見と開発

大学3年時の怪我がきっかけとなった。

(3) 時間的結びつき

ナショナルコーチ・大学チームコーチとして、練習・試合・合宿・遠征は殆んど行動を共にしている。またスポーツ場面以外にも、時々会って話をすることはある。

(4) 経済的な関係

体操教室等の収入の一部から選手へ捻出

(5) 他のコーチ、選手との関係

平等で民主的である。

(6) 練習・試合・合宿計画

選手が計画立案したものチェックするかたちをとっている。

(7) リーダーシップのタイプ

サポーター型、そして科学型

(8) 選手の生活管理

全面的に選手（具志堅）に任せている。怪我・栄養等の話し合いはするが指導はしない

(9) 選手の人間形成に関する配慮

人間形成は結果的なものであり、主眼は競技力にあるべきだと考える。

5 . コーチの役割意識について

(1) コーチとしての自己の長所と短所

長所としては、相手の立場を尊重する態度をとることで、短所としては、性格的に弱いことがある。

(2) 選手を受けもってから練習法や戦法を変えたか

選手の大怪我によって、それ以後は選手の強いところを伸ばす主義に変わった。

(3) コーチングのための勉強

何と言っても方法論が大切である。

(4) 選手が低迷する時の態度

選手と共に考え、問題解決していく。

6. その他

(1) 今後は指導者（養成）問題が重要である。

ア. 指導者研修コースの設定

指導者養成過程でのロスを省くことが必要である。良いものをもった人からどんどん聞き入れる体制づくりが大切である。

イ. 中学・高校・大学間の結びつきの組織化を求めるべきである。

ウ. プロコーチ制度の成立も重要である。

エ. クラブ、養成機関への援助充実

オ. 体操競技と器械運動の区別視に対する改革

小学校6年までは器械運動のみを実施しているが、もっと早くから体操競技を開始すべきである。

(2) コーチとして成功する秘訣

とにかく方法論に尽きる。方法論に関する知識をしっかりとることが重要である。その内容は、子供の扱い方・どれくらい尊重するか・運動をどのように伸ばすか一等である。

(3) 一流コーチになる条件

選手との出会いが1つの条件である。優秀な選手との偶然の出会いの要素はある。その選手の存在が逆にコーチを動かすということも多々ある。

(4) 選手を他のコーチに預けたり預かったりすることについて

なかなか困難である。やるとすれば、まず預かった選手を黙って見守り、相手を尊重しその後徐々にアドバイスしていくしかない。

(5) コーチにとって選手の存在は生きがいそのものである。

〔コーチ：塙原千恵子〕

1. 役割取得に関する社会的条件

(1) 家族学校などの影響

四人姉妹の次女であり、父親が日本体育大学のバスケットボール選手であったため、理解があり、奨励された。

高校時代の指導者は、民主的にのびのびとやれるような指導であり、大きな影響を受けた。

日本体育大学を卒業して助手としてコーチを始めた。

育児のために、大学での指導をやめて、朝日生

命体操クラブに移籍した。時間的余裕の必要性と同時に、体操界の低年齢化ともかねあわせての移動である。コーチとして出発するにあたって、今の主人（同種目）の影響が大きい。氏の指導タイプは自主性の重視である。共産国の指導者をモデルに、指導のタイプ、選手の特性を参考している。

(2) 役割の維持と発展に影響する人間関係

企業のバックアップによって、充分な指導が可能になる。

2. 役割遂行の経済的・物質的条件

シーズン中（3月～10月末）は休みなしで4～5時間。シーズンオフは月曜日に2～3時間。

コーチとして選手への金銭的配慮はしていない。コーチによって多少異なるが、100%とまではいかないが有給である。さらに会社の社会体育部門も担当している。

指導に関する自己犠牲は自分のためだと思って納得している。

3. 精神的信条と価値観

(1) スポーツ指導におけるモットー

選手に対して自主性を重視。主婦・コーチなど、とても大変な仕事の中でやっているがその原動力となるのは体操が好きだからである。

(2) スポーツ指導に全力を尽くす理由

指導部では、低年齢の段階ではスポーツ（体操）の価値づけが難しい。選手がやめると言い出しても、まず最初はその悩みを聞いて立ち直らせる方向に向けていく。

4. 選手との関わり方（森尾選手との）

(1) 出会い

個人的に2、3人あずかっていた中の一人であり、意図的ではない。

(2) 可能性の発見と開発

可能性を発見したのは、指導を始めてから三年目。素質としては低いが、努力する選手であるから。

(3) 時間的結び付き

練習5時間、試合では年間5～6回。1回につき1週間、合宿が年3回。なお休暇日数は年10日前後である。年1回のクラブ旅行の他には、個人的つきあいはない。シーズンオフの三ヶ月間に5～6回は、他のスポーツ人とのつきあいがある。

(バレエ、舞踊など)

(4) 経済的な関係

選手への個人的な経済的援助は行なっていない。会社からは旅費等は支給される。

(5) 他のコーチ、選手との関係

他のコーチとは対等の関係

(6) 練習・試合・合宿計画

練習計画は、指導者自身がたて、およそ1ヶ月くぎりでつくる。年間計画も試合などとかねあわせて計画する。なお学校が中心のため、学生生活にあわせている。

(7) リーダーシップのタイプ

人数的に多いため、立案したあとは、どちらかと言えばサポートー型である。又、子どもの理解が低いためと、短期間での向上をめざすために信念型である。

(8) 選手の生活管理

スポーツ関係者との付き合いは、指導者が管理する。コンディショニング、食事なども管理している。さらに学校との結びつきも考慮している。

(9) 選手の人間形成に関する配慮

現在は一人で動けるようになったが、集中力に欠ける面があったので、注意してきた。将来のことについては、本人の考えをもとに援助する。社会人として普通の状態でいてほしい。

5. コーチの役割意識について

(1) コーチとして自己の長所と短所について

長所は、しつこい、真面目、練習を休まない。短所は、気が短い。短時間で完成させなければいけないと思うため。

(2) 練習法や戦法を変えたか

練習法はすべてかわった。練習量が増大したし、競技力向上のために、シーズンオフでも準備をしてきた。

(3) コーチングのための勉強

例えば、松平康隆、広岡達朗氏らの指導哲学などを、1ヶ月に1冊程度読むなどした。

(4) 世界のトップレベルへの確信

世界選手権から確信した。

(5) 選手の記録が低迷する時の態度

記録が低迷した時、努力、努力でやってきたため、悲観的になってきたが、ぎりぎりまでだまっ

て待っている。

6. その他

(1) 日本のコーチシステムについて

日本のコーチシステムには確かに一流コーチと呼ばれる人がいるが、それが実際の指導で何になるのか。また一流コーチと呼ばれるのは、一流の選手を育てた人とされるが実際にそうなのか。だからこそ、指導についても様々で体系化されないのではないか。

(2) 選手補充の方法と特別な配慮

選手補充の方法は、特別なものをシステム化していないが、他のクラブからこちらに来た場合は、受けいれる。

(3) コーチング業と家庭生活

コーチング業と家庭生活との関わりでは、子どもに影響が大きい。

(4) 役割遂行上の苦労

コーチの役割を遂行するうえで最も苦労することは、この世界での人間関係、特に女性としての人間関係である。

(5) コーチとして成功する秘訣

現場で毎日、選手についていられることである。

(6) 理想のコーチ像について

選手との信頼関係がもてるコーチ

(7) 一流コーチになる条件

素質を持っている選手を見つけること。次に出会い、コーチとしての努力。

(8) 選手を他のコーチにつけること

分業的に他のコーチにあずけるのは構わないが、ひとりの選手をみた場合、心情的には嫌である。

(9) コーチにとって選手の存在は

コーチにとって選手の存在は、自分の生きがいとまではいかないが、重要な位置を占めているのは確かである。

(10) 選手にとってコーチの存在は

こわいものと受けとられているのではないか。

II. 水泳

〔コーチ：鶴峰 治〕

1. 役割取得に関する社会的条件

(1) 家族の影響

次男（陸上）、三男（ラグビー）、自分（水泳）そろってスポーツをした。水に縁の深い土地で水に親しんでいた。

(2) 影響を受けた指導者

中学時の英語教師（水泳国体で入賞者）と自衛隊で水泳を始めた頃の心理学の教師。

(3) 指導のタイプ

科学的で、心理的であり生活面でも納得のいく指導であった。

(4) コーチになろうとした契機

東京オリンピック後、日本代表の自分の責任を考え23歳で日大入学後に指導者をめざす。

(5) 役割取得に重要な影響を及ぼした人間関係 大学当時の恩師（浜口先生）

タイプ……上からの押しつけ型指導ではあったが、個人的には特性に合った指導であった。

大学の後輩（東島真二君）にも影響を受けた。今の自分の指導は、これらのミックスしたものである。

2. 役割遂行の経済的・物質的条件

(1) コーチとして働く時間・金銭

24時間すべてが指導時間だと思う。金銭的には完全に赤字である（収入3万に対し支出16万）。

(2) 援助・配慮の有無

選手（高橋）が高校時代には後援会や組織費、学校からの援助があり、個人的には負担はなかった。

(3) 自己犠牲の程度とその報酬の内容

家庭に対して、申し訳ない点はあるが自分が水泳を好きだから納得している。その報酬としては選手が人間的にも育ってくれることである。

3. 精神的信条と価値観

練習では、頑張るしかない。個人のレベルに合ったものでなければならぬ。根底にあるもの（栄養・睡眠）は私生活にわたって気をつける。

4. 選手との関わり方

(1) 出会い

全国中学校大会で個人的に目をつけ意図的に出会った。当時から可能性は見出せた。

(2) 時間的結びつき

年間350日。拠点強化校として援助を受けている。

(3) スポーツ以外の会合など

クラス会、その他激励会などに参加する。

(4) コーチであるためのスポーツ人とのつき合い スポーツ人の講演、学会などを聴き回る。

(5) 経済的な関係

本当に困っている者には援助するが技術が優れているから特別な配慮をするというようなことはない。

(6) 他のコーチ、選手との関係

平等で、協力的態度である。他のコーチからも技術的な助言を受けている。

(7) 練習・試合・合宿の計画について

長期計画は監督、短期はコーチが決定。

(8) リーダーシップのタイプ

カリスマ型で信念型である。

(9) 選手の生活管理

ア. スポーツ関係者とのつき合い

ウェイトトレーニングや病理学の専門家とのつき合いもさせてている。

イ. トラブルの解決

トップスイマーとしての責任を自覚させ管理している。

ウ. タイプ

統制型と指導型をミックスした型である。

エ. 生活態度

水泳は人間形成の道なりと常に指導している。学業の両立をうったえており、第一に社会人であり、第二に学生であり、第三にスイマーであると指導している。

5. コーチの役割意識について

(1) コーチとしての長所と短所

短所……話が長いこと

(2) 選手をもってから練習法や戦法を変えたか
以前はハードな練習が主だったが、今ではより少ない練習時間で効果を最大に出すことを考えている。

(3) コーチングのための勉強

すべてのスポーツから役立つものはすべて取り入れようと思う

(4) 選手の低迷時の態度

悲観的にならず、選手を信じて引張っていく。

6. その他

(1) 日本のコーチシステムについて

コーチに社会的・経済的保証を与えるべきである。現在のままでは利口なコーチはコーチから離れていくだろう。さらにコーチ法はもっと継続的でなければならないと考える。

(2) 国や体協への意見

文部省とは別に、体育省あるいは体育局を設けたらどうか。健康あっての知育、德育である。

(3) 選手の引退に際しての配慮

就職その他の保証の配慮（推薦状等）などをしっかりとしてほしい。

(4) コーチングと家庭・職業生活等

家庭に対する問題（特に妻子との問題）が苦勞の種で、家庭を犠牲とすることが美德とされがちだがそれは良くないことだ。

(5) コーチとして成功する秘訣は朝早く起きることができること。

(6) 理想のコーチ

有言実行のできるコーチ

(7) 一流コーチになる条件

優秀な選手との出会いである。

(8) 選手を他のコーチに任せたり他の選手を預かったりすることについて

信頼関係（選手とコーチ）があれば大丈夫。

(9) コーチにとっては選手とは、選手にとってコーチとは

コーチにとって選手は貴重品、選手にとってコーチは鬼である。

〔コーチ：渡部敏夫〕

1. 役割取得に関する社会的条件

(1) 家族

家族はしかたがない、やむをえないと思っているようだ。

(2) 影響を受けた指導者

職場の設立と同時に入社したため、先輩がいなかった。全般的には在京の民間企業の指導を受けた。

(3) コーチになるきっかけ

特に水泳のコーチになりたかったのではなく多種目にわたるコーチをやろうとした。企業として水泳が主力だったので、結果として水泳コーチ

になっている。

(4) 他人との関係

これまで、スポーツ関係者以外の人と知り合うことがあまりなかったので、独自の考えでやっている。

長崎選手が、中央の大会に参加するようになってから、多くの人に会っていろいろなアドバイスを受けるようになった。その中から自分なりに判断してやるようにしている。また水泳連盟も協力的で、地元で育てることが認められている。

2. 役割遂行の経済的・物質的条件

(1) 時間的・金銭的負担

現状では、個人的に直接援助してやる、ということはない。知事・市長等からのプライベートな援助はある。強化費があるようだが個人には与えられていない。

(2) 自己犠牲への報酬

日本人的だが、栄誉あること、なさねばならぬ、ということだけ。

3. 精神的信条と価値観

(1) 日常生活のモットー

モットーとして言葉に表わすものは、もっていない。一日一日を大事にやっていくことを考えている。

健康、人との接し方、人の話を聞く耳をもつなど、スポーツ人として大成することを大事にしなければいけない。

経験的に苦しさの連續をのりこえていくこと。そのために一つ一つを大事に、と考えている。

(2) スポーツ指導におけるモットー

スポーツ指導では、信条よりも健康面への留意が中心になる。風邪をひかない、おなかをこわさない、ケガをしない、を三大モットーとしてそれを意識づけるにはどうしたらいいかを考えている。長崎選手が、年齢的にいちばんむずかしい時期なので大変であるが。

4. 選手との関わり方

(1) 出会い

民間スポーツクラブでの偶然的なもの。

(2) 可能性の発見と開発

小学校5年生ぐらいまでは、一般の児童よりは速い、という程度。5年生終わり頃から、大会毎

に記録が大きく伸びるようになった。泳ぎとかバネを見てではなく、大会を重ねていくうちに、将来を確信するようになった。

(3) 時間的結びつき

日本水連は選手団に、強化コーチが選抜されて同行するので、常に一緒に大会や合宿に参加する訳ではない。

クラブではマンツーマンではなく、グループ指導をしている。従って練習は他の人と同じである。

家族では親がついているし、自分の時間も持つ必要がある。

成長期であり、ハードなトレーニングはむずかしい。又、精神的にまいりやすい年代でもあり、あまり根をつめさせないようにしている。

(4) 経済的な関係

直接的な経済的援助はやっていない。

(5) 他のコーチ・選手との関係

グループで指導しており、平等に扱っている。

(6) 学校との関係

大会等で学校を抜ける機会は多いが、いろいろと気を使ってくれて、協力的である。

(7) 学友との関係

人づきあいが良いので、学校の中でもうまくいっている。

(8) 練習、試合、合宿計画

国際大会等、試合にあわせて年間サイクルでスケジュールを作っている。

(9) リーダーシップのタイプ

サポート的にやっている。コーチングからマネージメントまで何でも屋さんのやり一つの事のみを追求できない。

(10) 選手の生活管理

私生活にはタッチしない。日常生活のコントロールはあまりしない。彼女もしくは母親が報告してくれるので、家族、本人、コーチの相互信頼ができている。

5. コーチの役割意識について

(1) 自己の長所と短所

おく手で慎重。陸上出身のため、世界がちがい、無謀さが許されず、どうしても慎重にならざるを得なかった。マスコミなどとの関係もあって、これが一番苦しいところである。

(2) コーチングのための勉強

もちろん本は読んでいるが、特別なタネ本というものはない。合宿などのコーチ同志の話し合いや選手との話し合いなどから得たものが、実際のコーチングでは大きい。

自分の目で見て確かめたものの方が、身になっている。

(3) 世界のトップレベルへの確信

大会を重ねていくうちに確信した。

(4) 選手の記録が低迷する時の態度

記録が伸びている最中なので、どこまで伸ばせるか、という期待と、いつ止まるのか、早く来たらどうしようかという不安の両方がある。

女子のピークは高校前半といわれているが平泳ぎはややちがうと思う。日本人向きにキック力を使って泳げば、もう少し伸びるのではないだろうか。なるべく長く選手生活を送らせてやりたい。

6. その他

(1) 日本のコーチシステムについて

日本水連のコーチ資格が生かされていない。結果報告会的な研修会よりも、ディスカッションの方が有益である。現場のコーチの要望を研修システムにどれだけ取り入れるか、またそれをどう生かすか、が重要であろう。

(2) 国や体協への意見

援助などの件は、競技団体が交渉するので個人的なことは特にない。

(3) 選手補充について

長崎ほどの素質をもった者と出会うことはもうないであろう。又もう一度、下の年齢からじっくりやっていくしかないであろう。

(4) 選手の引退に際して

コーチの枠内で配慮して協力してやりたい。将来のいろいろな時点で相談にのったり、援助したりなど、自身のできる範囲でやっていくつもりである。

一流選手であった者の受け入れ態勢にもっと生かし方があるのではないか。

(5) コーチングと家庭生活

生活は苦しいといえば苦しい。年齢的にそういう時期だから。

(6) コーチ上の苦労

年齢的には、会社（企業）の経営・管理も中心になってやらねばならないところであり、企業のメリット、選手のコーチングの両方を追求せねばならない。選手だけみているというわけにはいかない。

(7) コーチとして成功する秘訣

慣れてくると熱意はさめてくる。満足感を味わいながらやっていくためにも、情熱しかないのであれば。

(8) 一流コーチになる条件

自分の場合は、出会いが才能（長崎の）であったので、それが中心である。

選手がコーチのコントロールで動くのではなく、選手が常に安定した力を出せるように自分自身をコントロールできるようにコーチするのが自分の役割である。

(9) 自己コントロールできるようにする方法は

選手の飲み込みの程度にもよるが、シーズン始めに選手一人一人と個人面接をして、弱点を確認する。それによって、コンディショニング・トレーニングについて決めていくが弱点、すなわち今年伸びどころがわかっているから、子ども達の取り組み方がちがってくる。

大会では、自分の時間を持つように、じっくりレースのことを考える時間を持つよう指導している。リラックスも必要だが、同時に緊張も必要。

健康管理や日常生活の目標は、自分でコントロールさせる。大会の目標記録は、コーチ側から言うことが多い。

(10) 選手はコーチをどうみているか

やさしい先生、ぐらいにしか思っていないのでは。特になまけているとかであれば口うるさく言うが、個人が伸びていれば選手が自分でうまくやっているかどうか、ぐらいしかコーチはみていない。

III. 柔道

〔コーチ：佐藤宣践〕

1. 役割取得に関する社会的条件

(1) 家族の影響

父が陸上選手で体育の教授、母も水泳選手であった。兄は柔道をやっていた。自分が柔道をするのは全くの公認であった。

(2) 影響を受けた指導者

恩田氏（教育大コーチ）に影響された。彼は柔道の専門家ではなく柔軟性に富んだ考えをもっていた。

もう1人は、猪熊先生。勝負の詰めを教わった。

(3) コーチになろうとした契機

大学当時から休み中は母校で指導をしていたのでその頃からコーチになろうと思った。

(4) 役割の維持・発展に影響する人間関係

柔道以外だが、バレーボールの松平康隆氏、プロ野球の川上哲治氏、広岡達朗氏などに学ぶところが大きいのではないか

2. 役割遂行の経済的・物質的条件

(1) コーチとして働く時間・金銭

生活すべてがそれにつながるので時間では把握できない。全日本のために90日間（遠征含む）、8カ月間が東海大コーチとして使える時間となる。

(2) 援助や配慮の有無

殆んど大学側が援助してくれる。

(3) 自己犠牲の程度

時間的には自己犠牲はあるが、金銭的には犠牲はないと思う。

3. 精神的信条と価値観

(1) 日常生活のモットー

“力めれば立つ”（力必立）これは全日本に優勝して以来。

(2) スポーツ指導におけるモットー

“力必立” “文武両道” “一期一会” 学生に対しては “一戦入魂” とおきかえる。

(3) スポーツ指導に全力を尽くす理由

柔道が好きであるから。また柔道によって今の自分がある（社会的地位・名誉 etc）での恩返しの意味もある。

4. 選手との関わり方（山下選手との）

(1) 出会い

是非欲しい素材だったので意図的に獲得した。

(2) 可能性の発見

出会って1ヶ月の遠征時の彼の集中力をみて確信した。しかしここまでくるとは思っていなかつた。

(3) 時間的な結びつき

9～10ヶ月は行動を共にしている。

- (4) スポーツ以外での会合
年間1～2ヵ月（職場が同じなので）
- (5) スポーツ人とのつきあい
他のスポーツとは余りないが大学内ではある。
柔道の話が殆んどである。
- (6) 経済的な関係（援助等）
月に10万円平均（食事、合宿・遠征などでは1人2万円の援助がある。）
- (7) 他のコーチ・選手との関係
多少ねたまれているかも知れないが心理的圧迫は感じない。他の選手には山下君が気くばりをしてくれている。年功序列等の苦労はない。
- (8) 練習・合宿・遠征・試合等の計画
すべて自分が決定する。データ中心型である。
- (9) リーダーシップのタイプ
自分がいなくても成果ができるような指導
- (10) 選手の生活管理
強くなるための最低限度以外はすべて自由である。
- (11) 選手の人間形成に関する配慮
柔道で培ったものを發揮するためには最低“文武”的文が必要である。自分の生きる姿を通して指導者のるべき姿を教えるつもり。

5. コーチの役割意識について

- (1) コーチとしての自分の長所と短所
しつこくて、粘り強い点が長所であろう。
- (2) 練習法を変えたか
体力トレーニング（筋力・スタミナ・パワー）を取り入れた。戦法としては寝技を指導した。
- (3) コーチングのための勉強
いつも貪欲に資料を取り入れようとしている。
時間の許す限りにおいて。
- (4) 選手の低迷時の配慮
選手がその低迷期から抜け出てくるのを待つタイプ。

6. その他

- (1) 日本のコーチシステムに対して
コーチに対して金銭的配慮が欲しい。
- (2) 選手補充について
個人の力で引っ張ってくる。
- (3) 選手の引退時の配慮
相談にはのるが、決めるのは本人である。最低

27歳まではやらせるつもり。

(4) コーチングと家庭生活

妻の協力が必要である。金銭的には迷惑をかけないよう努力している。コーチを職業としているので相対的に納得していると思う。

(5) 役割遂行上、苦労すること

経済的な問題と選手指導で、どこまで自分の理想に近づくかということと自分がいる時といない時で同じ雰囲気で練習をしてくれるかということである。

(6) コーチとして成功する秘訣

性格的に粘り強かったこと（自分の場合）

(7) 一流コーチになる条件

自分の才能・努力がまず第一で、良い組織と選手、次に運の順である。

(8) 理想のコーチ像

マネージメントも現場の指導も両立できるコーチ

(9) 選手を他のコーチに預けたり、預かったりすることについて

低いレベルでは一貫したコーチが必要であるが、高いレベルに慣れたコーチをかえるのもいいかも知れない。

(10) コーチにとって選手とは、選手にとってコーチとは

コーチにとって選手は自分の夢をたくしている人であり、選手にとって自分之力を伸ばすために必要な存在である。選手はコーチにとって子供同然であり、そうでなければ信頼関係はもてない。

〔コーチ：中村良三〕

1. 役割取得に関する社会的条件

(1) 柔道の専門家になったきっかけ

高校の柔道部の顧問教師に、教育大進学を勧められたので。

(2) 指導者になったきっかけ

大学卒業時には、柔道の専門指導者になろうとは考えなかった。母がいる郷里で、高校教師をずっと続けるつもりで、教職に就いた。

(3) 大学で指導することになったきっかけ

教育大に武道科が設置され、恩師から呼ばれた事と、当時、教育大の柔道部が低迷していたこと。求められたのなら、やってみようと考えた。

(4) スポーツ以外の人の影響

柔道一色の生活だったので、他の人とのつきあいが少なく、柔道以外の人の影響は受けていない。

(5) 役割モデル

中学時代の柔道部の先生をモデルとして、悪いところを修正しつつ、自分流の指導法をつくろうとしている。

2. 役割遂行の経済的・物質的条件

(1) コーチに要する時間

一日がほとんど柔道に関連した時間である。部の指導だけで2.5~3時間からやや多いぐらいの時間を要している。特別の用事がない限り、毎日練習にでていく。

(2) 金銭的負担

個人的に選手に現金を直接渡すことはない。飲食などに連れていくことはある。現金を出す場合は、クラブに対してとかコーチ陣に対して渡している。

給料はすべて家に入れる。非常勤や原稿などのバイトで得た収入は、自分で自由に使えるので、すべて部の方にいく。

その他に、OB会からの援助、卒業生(若手有志)からの援助がある。

(3) 自己犠牲の程度とその報酬の内容

柔道部中心に動けば、必然的に家庭は犠牲となる。はじめから言いきかせ、納得したうえのことであり、家庭サービスは一切ない。

代償は考えていない。強いていえば柔道部の優勝、これが仕事だと思っているし、生きがいになっている。

3. 精神的信条と価値観

(1) 日常生活のモットー

特にもっていない。

(2) スポーツ指導におけるモットー

「筑波大生はすべてに満点を求められているから、すべてのことにがんばらねばならない。一人で全部やるのが不可能なら、分業で全体が満点になればいい」ということをよく言う。ただし、学生に直接言うよりも、上級生から下級生に伝えるようにしているが。

(3) スポーツ指導に全力を尽くす理由

全然わからない。そういうものだと思っており、

やらない方がおかしい、と感じている。

4. 選手との関わり方(山口香との)

(1) 出会い

向こうから筑波大を希望して入学した。

(2) 可能性の発見と開発

直接知ったのは、高校2年の時、世界選手権を取る力はすでにもっていた。

日本の女子はレベルが低いから、手づくりでやれば上位になれるし、小さい頃からやっていたので、身のこなしができている。

(3) 時間的結びつき

毎日曜は休み。夏休みは約2週間。試合は年30日程度。

大学の合宿は年2回、各1週間。全日本の合宿が年5~6回。毎回約1週間。

(4) 選手と他の人の接觸

インタビューなどは非営利であれば、積極的に受けさせている。女子柔道のPRにもなるし、柔道の役に立ったことになるから。

さらに、彼女自身にとっても、新たな刺激になったり目標の再確認になったりするから。

(5) 練習

全体計画を作り、1パターン10日ぐらいやってみて、やりながら改善していく。個人技術は全体練習の中で、一人一人が工夫して自分で作りあげる。

(6) リーダーシップのタイプ

練習内容はすべて一人で決める。その中でどんどん新しいものをやってみる。良い悪いの判断はやってみて初めてつける。

対象、環境に応じた最良の方法をさがす。

(7) 選手の生活管理

こちらから生活に枠をはめるようなことはしないようにしている。

5. コーチの役割意識について

(1) コーチとしての自己の長所と短所

長所は、いろいろなことを思いついて、それを工夫してやろうとする事。

短所は、あきっぽい事と、年とともに雑務も増えて、根気・情熱がおちていること。

(2) 練習法や戦法をかえたか

山口選手がきても、全体の練習はかわっていな

い。彼女には、これから少しづつ個別に手を加えていくつもりでいる。その必要性がわかったから。

(3) コーチングのための勉強

日本協トレーニングドクターになっており、OBなどを含めて研究チームをつくり、トレーニング法だけでなく、競技力全体の研究をしている。

6. その他

(1) 日本のコーチシステムについて

体協から、主任コーチ30万円、コーチ10万円の手当が出てが出るようになったが、諸外国に比して低額であり、所属団体に負担させているのが実情である。強化には国の援助（練習・試合の経費・生活費）が不可欠である。

(2) 選手の補充の方法

各大会でみかけた有力選手には、マネージャーが筑波大のシステムを紹介して誘っているが、100%の入学を保証できないのが欠点。

(3) 卒業後の進路指導

山口選手自身は、漠然と高校教師を考えているようだが、私としては、大学院に進学し大学（体育センター等）に残って女子柔道を指導してもらいたい。

(4) コーチの役割遂行上の苦労

いかにやる気を出させるか、いかに自らやる気を出すように選手をもっていくかが重要。これができる選手は一流になれる。

(5) コーチとして成功する秘訣

いい選手がいて、充分な金があり、やりたいことをやらせてもらえば必ず強くできる。

(6) 理想のコーチ像について

理想を一つの形に決められないと思う。

(7) 一流コーチになる条件

日本の柔道界は、選手時代の実績がものをいうので、いい記録がないと、全日本のコーチになれない。この条件をふまえたうえで、努力すれば、ある程度一流のコーチになれると思う。

(8) 選手がコーチを変えること

どこに選手をあずけても、個人が努力して自分の技をつくっていくのだから、新しいものを学べるのは、良いのではないか。

(9) コーチにとって選手とは

特に気負って考えていない。

(10) 選手にとってコーチの存在は

別にどうとも思っていないのではないか。そんなに恐れられてもいないだろう。昔ほどのつながりもなく、関係がクールなものになっている。

IV. レスリング

[コーチ：富山英明]

注) 選手、兼コーチである

1. 役割取得に関する社会的条件

(1) スポーツ活動に対する雰囲気

全員がスポーツに理解があり、スポーツを奨励する雰囲気があった。特に兄2人からは強い影響を受けた。

(2) 影響を受けた指導者

高校（土浦日大）時代の監督

(3) 指導のタイプ

理論派で熱情あふれるタイプ

(4) コーチになろうとした契機

大学（日大）卒業後、大学に残ることになったから。

(5) 役割取得に影響を及ぼした人間関係

高校時代の監督である。

(6) 役割の維持・発展に影響する人間関係

大学時代の先輩・後輩あるいはOB等々。

2. 役割遂行の経済的・物質的条件

(1) コーチとして働く時間、金銭

自分が選手でもあるので練習時間は殆んど学生と共に練習する。むしろ練習時間以外のコーチングの方が多い。金銭的には明確にはわからないが多分、独身でなければ無理だろう。

(2) 援助や配慮の有無

援助の殆んどが体協からで、OBからも時おり受ける。

(3) 自己犠牲の程度と報酬

今のところ犠牲という意識はない。

3. 精神的信条と価値観

(1) 日常生活のモットー

“時間を大切にすること” “集中して発散すること”

(2) スポーツ指導におけるモットー

“課題をもって練習に臨むこと”

(3) スポーツ指導に全力を尽くす理由

レスリングを通して後輩を育てたいから

4. 選手との関わり方（小林選手との）

(1) 出会い

小林とは高校・大学の先輩・後輩の関係であり、その中で出会った。

(2) 可能性の発見

大学入学当時から見られた。

(3) 時間的な結びつき

通常から合宿宿形態なので24時間殆んど行動を共にしている。夏・冬の休み（各2週間）は毎日練習。遠征は海外へ4回ぐらい。

(4) スポーツ以外の会合

レク活動やマスコミ関係などに出席する。

(5) スポーツ人とのつき合い

格闘技関係者が多く、コーチ会議などに不定期に出席する程度。

(6) 経済的な関係

殆んどが体協からの援助で足りるので、残りを自分のポケットマネーでまかなう程度。

(7) 他のコーチ・選手との関係

平等で円満で楽しい雰囲気である。

(8) 練習・合宿・遠征・試合などの計画

すべて自分（コーチ）が決定。特にウエイト調整があるからデータ中心になる。

(9) リーダーシップのタイプ

信念型である。

(10) 選手の生活管理について

コンディショニングはもちろんのこと、特に礼儀に関して注意している。人間形成に関する配慮は必要であるし、生活態度が競技成績に現われることが多いと思う。

5. コーチの役割意識について

(1) コーチとしての長所と短所

短所は短気であること、自分が先走りする傾向があること（選手のレベル以上のことを指導しようとすることがある）。長所は自分のもっているものに自信をもっているということ。

(2) コーチングのための勉強

勉強の内容は、減量（食事・カロリー etc）、準備運動（ストレッチング・エアロビクス）などである。とにかく他種目を取り入れることを考えている。

6. その他

(1) 日本のコーチシステム、体協への意見

経済的援助が必要である。やはり共産圏は強い。

(2) 選手補充について

最近では大学進学の際に、その大学の就職状況などで判断する例が多いが、以前のように特定の監督やコーチに惚れ込んでという形が望ましいのではないか。

(3) コーチングと職業生活

非常にうまくいっており満足している。特別な苦労も感じていない。

(4) 役割遂行で最も苦労するのは

選手指導、人間関係、組織、経済的面とすべて甲乙つけ難いほど重要だと思う。

(5) コーチとして成功する秘訣は

とにかく情熱である。

(6) 一流コーチになる条件

才能、選手との出会い、良い組織、努力、運とすべて大切な要素である。

(7) コーチにとって選手とは

良き仲間、そして良きライバル

V. シンクロナイズドスイミング

〔コーチ：井村雅代〕

1. 役割取得に関する社会的条件

(1) 家族の影響

母親がスポーツに対して協力的で理解があった。シンクロを選んだのも母親の勧めによる。

(2) 集団や組織の影響

浜寺水練学校の影響が大きい。

(3) コーチになったきっかけ

現役引退後、浜寺水練学校を見に行ったとき、コーチがいなかった。その時、選手がコーチに飢えていたように感じたし、自分が実際に選手に接してみて自分も役に立つのではないかと思った。

(4) 役割取得に重要な影響を及ぼした人間関係別はない。ただ選手を束縛するコーチにはなりたくなかった。現役時代のコーチの中には、えこひいきがはげしく気分屋だった人もおり、あのようなコーチにはなってはいけないと思った。

2. 役割遂行の経済的・物質的条件

(1) コーチとして働くことによって消費する時間・金銭とその援助・配慮

毎日、朝9時から夕方6時までの9時間、家にい

ない。シンクロはお金がかからないから形式的持ち出しじゃない。

交通費、合宿費、遠征費は浜寺水練学校からいくらかもらう。体協からはナショナル級だけ援助してもらっている。

(2) 自己犠牲の程度とその報酬の内容

主人が犠牲になっている。犠牲をはらってまで得られるものは、選手にお金では得られない何かを教えてやれるという充実感が得られること。

3. 精神的信条と価値観

(1) 日常生活のモットー

何事も中途半端にしない。選手には「勉強もしろ、シンクロもしろ」と言っている。

(2) 指導におけるモットー

やるからには強くならなくてはいけない。強くならうと思わなければいけない、と教えている。

(3) 指導に全力を尽くす理由

やる価値がある。生活のはりがでてくる。そして選手のためと思わず、自分のためと思いつかんでいる。

4. 選手との関わり方

(1) 出会い

12年前、自分が現役選手最後の年に、元好が浜寺水練学校に入校してきた。指導したのは、コーチになって2年目から。

(2) 可能性の発見と開発

入校した時からあったと思う。シンクロにむいた体つきだった。スタイルが良くて、手足が長く個性があった。他の選手にはない、何かひかるものを感じた。

(3) 選手との時間的結びつき

年間トータルで10ヶ月以上顔を会わせているが、練習以外では選手と接しないように心がけている。

(4) 経済的な関係

選手の宿舎や食事への援助は別になし。選手のスポーツに関わる経費にも直接援助はしていない。

(5) 他のコーチ・選手との関係

えこひいきをしないようにしている。選手個人よりもチームを育てるようにしている。他のコーチとの関係は、自分がヘッドで、あとは横にならんでいる。

(6) 練習・試合・合宿計画

練習計画などは、選手のコンディションをみて自分で勝手に決める。試合をみとおして長期的にたてた後、細かい時間帯はひと月ごとに決める。データーの分析はする方である。

(7) リーダーシップのタイプ

「私についてきなさい」というタイプ。トップレベルの子には科学型で、それ以外の子には信念型でやっている。

(8) 選手の生活管理

マスコミに対しては、カベになる。マスコミはある段階までは自信となるが、それをすぎたら逆に害になると思う。

友人関係など、シンクロのこと以外はなるべく口を出さないようにしており、本人にまかせるようしている。

コンディショニングについてはいろいろ言うが、その内容は自分でつくらせている。

生活態度などについても何も言わない。いまさら礼儀など言う必要はない。

(9) 選手の人間形成に関する配慮

元好はしっかりしているが反面きついので、自分の力だけで成長してきたのではないことを教えた。強いが冷たい選手にはなってほしくない。感動しない子にはしたくない。

5. コーチの役割意識について

(1) コーチとしての自己の長所と短所

長所は最後までめんどうをみること。短所は言いだしたらきかないこと。

(2) 練習法や戦法がかわったか

別にかわっていない。他の選手と同じ。

(3) 選手の記録が低迷する時の態度

楽観的。不調になって落ちこんでもいい。時間が解決してくれたり、忘れる時もある。コーチが必死になることではない。それよりも次の策を練る。いい言葉ではないが、選手はコーチの実験材料。つぶれることをこわがってはいけないし、何もできない。たとえつぶれても、元にもどす自信はある。

6. その他

(1) 国や体協への意見

コーチを社会的に保証してほしい。

(2) 選手補充の方法と特別な配慮

浜寺水練学校から発掘するだけ。素質のありそうな、ましな子を見つけるだけ。

(3) 選手の引退に際しての配慮

シンクロに貢献してもらいたい。

(4) コーチ業と家庭生活との関係

食事の用意が大変。掃除・洗たくなど最低のことしかしていない。主人に対してハンデを負っている。

(5) 役割遂行上の苦労

選手に負けないこと。コーチから、精神的・技術的に習うことは終わりだと思わせない。

政治的な面(体協)でのつきあいに苦労する。

組織的な問題としては、もっと安心してコーチできるようにしてほしい。共産圏に賛成だとは言えないが、一つのクラブに頼ることには賛成できない。

(6) コーチとして成功する秘訣

たえること・待つこと・選手に信用させること。ひきつけること。

(7) 理想のコーチ像について

選手も考え、コーチも考えながらいく関係。互いに考える関係。選手の主体性を配慮できるコーチ。

(8) 一流のコーチになる条件

①本人の努力②よい組織③才能④運⑤選手との出会い。選手はつくるもの、と考えている。

(9) 選手を他のコーチにつけること

いいことだと思う。やってみて適さなかったらもとに戻せばよい。シンクロは採点競技なので違う人の目に触ることは大切である。

(10) コーチにとって選手の存在は

やりがいのある選手

VII. 陸上(マラソン)

[コーチ：滝田詔夫]

1. 役割取得に関する社会的条件

(1) 家族の影響

小学校時代に弱虫だったので、強くなりたくて柔道を始めた。病弱のため家族は自分がスポーツをすることには反対であった。中学3年時にはすでに2段であったが、成田高時代陸上部員の代理で出場したことから陸上に転向した。インターハ

イには出場したが試合で実力を発揮するタイプではなかった。

(2) 役割取得に影響を及ぼした人間関係

成田高校時代の恩師、山本先生。陸上競技の楽しさ、面白さを教えてくれた先生であった。

(3) 役割の維持発展に影響する人間関係

特はない。人のもっているところを学ばせてもらって、それを取り入れながら自分がその人を追い越してみたいという気持ちが強かった。

2. 役割遂行の経済的・物質的条件

子どもたちと共に学び成長している状態で努力している。だから時間的犠牲は大きい。女房をせかして自分は好きなことをやっている。それも土・日・祝日もなく、朝早くから夜遅くまで……。援助は余りない、OB会組織からある程度の補助は受けている。経済的には赤字だが選手には負担をかけないようにしている。報酬としては、良い選手が育つことだと思う。犠牲になっているとはひとつも思わない。

3. 精神的信条と価値観

(1) 日常生活のモットー

“どのような試練を受けようとも心動かす”

(2) スポーツ指導におけるモットー

子どもたちを見ながら一緒にやっていくこと。

4. 選手との関わり方(増田選手との)

(1) 出会い

意図的な出会いと言える。増田の方からは自分を親って、自分の方からはスカウトという形をとったから。最初に見たのは中学2年の県大会であった。

(2) 可能性の発見と開発

マラソンランナーとしての素質については高校1年の時であった。

(3) 時間的結びつき

成田高校へは週3日、5時間の授業に行っている。

(4) 練習計画

最近は計画の立案方法を教えていたが今では選手に立てさせている。それにアドバイスを加える程度。

(5) リーダーシップのタイプ

サポーター型

(6) 選手の人間形成に関する配慮

競技生活を通じての人間形成なのか、人間形成を配慮した指導がなされているのかについては両方のことが言える。成田山の高僧に精神的な訓練をしていただき、それと対応したかたちで我々が指導している。

5. その他

(1) 日本のコーチシステムについて

国や体協への意見

全く考えていない。今の自分のできる努力をし

2. 団体種目について

(1) 全体的まとめ

1. 役割取得の社会的条件

家庭の雰囲気等は、奨励的ではなくまた否定的でもない。

2. 役割遂行の時間的・経済的条件について

(1)時間……バレーボールなどでは練習のために、かなりの時間が費されている。「コーチは家族の一員」というような団体種目の雰囲気がそうさせているようだ。

(2)援助……金銭的援助は、主に企業によるものようだ。

(3)自己犠牲の程度と報酬……団体スポーツの場合は、時間的・精神的にかなり犠牲を払っているようであるが、それに対して具体的報酬はなく、精神的な満足・名誉などといったものを報酬だと考えるところは、個人種目の場合と同様である。

3. 精神的信条および価値観について……各人各様の回答が見られるが、その中でも「選手ひとりひとりを大切にする」「個人の能力や特徴を尊重する」など、指導対象に応じたコーチをする、というような点が目につく。一流コーチは、強い信念は持っているが、かといって画一的な指導はしない。

4. 選手との関わり方

(1)出会い……個人的出会い。意図的出会いを求め、自ら積極的にアプローチする傾向があるようだ。

(2)その他……経済的に個人的援助などはしないようだが、個人種目とは対照的に、練習だけでなく、

それを評価してもらひながら進んでいこうと思っている。今の日本では多少のことと文章化しても実現は無理だろうから。

(2) 役割遂行の上で最も苦労することは

組織の問題と経済的な問題である。解決方法については暗中模索の状態である。

(3) 一流コーチになる条件

とにかく一生懸命にやること。今日より明日という気持ちでコツコツと積み重ねること。その度合は人には負けないという自信はある。

生活全体でのつきあいが見られる。時間的にも一緒にいる時間が長く、また生活・人生全体にわたっての指導が行なわれ、更に引退後の配慮がされるなど、競技以外での人間関係がチームを支えるといった感がある。

5. その他

(1)日本のコーチシステムについて……ここでは、コーチの社会的・経済的地位の保証、スポーツ自体の社会的評価の向上などが挙げられる。

(2)成功の秘訣・一流コーチの条件……「科学する心」「向上心」「知識」「情報収集能力」「PRの能力」「企業心」などが挙げられている。団体種目では、企業など周囲の協力をとりつける能力は大きな要素であるようだ。

(2) 面接対象別面接内容

I. バレーボール

〔コーチ：松平康隆〕

まず最初に、競技形態（とくに個人種目と団体種目）による“コーチ”的持つ意味の違いに着目する必要があるだろう。チームスポーツでは、コーチも競技者（選手の一員）である。一方、個人スポーツにおいては、所謂コーチ的役割を果すことになる。

1. 役割遂行の経済的・物質的条件

(1) 時間的な面

バレーの監督は、家族の一員であり選手と共に合宿生活をする。具体的には年間200日以上も家を空けることになる。しかしこれが世界一への道へつながる。

(2) 経済的な面

過去10年間バレー ボールコーチとしての収入は皆無であったが、企業からの社会的還元という形で金銭は得られた。しかしこれは、体協などの組織的なものではなく、個人的な企業との関係から得たものである。

(3) 自己犠牲の程度と報酬について

時間的犠牲(家庭や妻子への)、経済的犠牲に加えて、チームゲームの性質上どうしても精神的犠牲も払わねばならない。それだけに、コーチや監督に対しては確固たる指導のバックボーンを用意すべきである。彼等に与えられる名誉が何よりの報酬だと思う。例えば文化勲章など。結局トータルすれば、コーチや監督の方が苦労度が大きい。

2. 精神的信条と価値観

(1) モットーについて

モットーは、自分の良き先輩の方々や、貴重なプレインから得てきた。

(2) スポーツ観について

ア. スポーツは文化である。

何故、日本人はスポーツを文化と区別(大低スポーツが下位になる)するのかが疑問である。スポーツ界から文化勲章受賞者が出てても何もおかしくはないと思う。

イ. バレーに関する考え方

①賢い選手を育成すべきである。

バレー ボールによって逆に選手を殺してしまうようではいけない。

②コーチは選手のなれの果てである。

選手を続けられなくてコーチになる場合が多いわけで、その意味でも自分の指導する選手たちに憧れることのできないコーチはコーチではない。

③バレー界に巢食う“根性論”を撒回すべきである。

ゲームに負けたり、技術がマスターできなかつたりするのは決して選手の根性不足などではなく、コーチや監督の責任なのである。

ウ. バレーと科学性について

競技種目の特性によって、精神面と身体面の必要な割合に微妙な差異があるので、

それぞれに求める科学性も違うだろう。バレー ボールの場合は、主に、選手発掘時に生かされるべきだと考えている。

3. 選手との関わり方について

(1) 経済的な結びつきについて

選手に対して直接的に個人的援助はしていない。経済面においては、選手は実に恵まれていると言える。具体的には、練習・合宿・遠征費等は一切、企業や体協から援助される。更に、日本リーグ、実業団リーグ等は企業の終身雇用制に支えられている。つけ加えれば、常に練習、試合優先の体制ができている。もはや、共産国や社会主義国をステート・アマチュアの国などとは言えない。

(2) 引退(選手生命を失なった選手)に際しての配慮

日本は終身雇用制に支えられているので経済的には不安はないはずである。技術的には個人差がある。例えばコーチへの転向、また大衆スポーツ領域への移行、あるいは一般社員に戻るなど。それ程に危機感は感じていない。

4. コーチの役割意識について

(1) コーチングのための勉強

ア. 選手の動機づけの問題

一流選手(オリンピック級)にはすでに動機自体はあるのだから、あとは彼等のプライドや名譽欲のバックアップをいかに図るかが肝心である。選手のやりがいの創造というのはコーチの大切な役割の1つだと言える。所謂、マネジメントの勉強も必要である。

イ. 視野を広げることの必要性を認識すべきである。

教養(=使える知識、人間科学など)を深めることと、経験を積むことによる視野の拡大を図ることが大切である。

ウ. 練習時、選手に求められるもの

真面目さ、楽しさによって生み出される創造性である。コーチは選手に対して、この真面目さと楽しさを生み出させる働きかけの役目をすべきである。結局、創造性はコーチが作るのだという認識を持つべきである。

- (2) 一流コーチとして認められるそのプロセス 実績が第一であろう。この実績にも、指導するチームの競技成績、コーチの選手時代の実績、さらには、一生懸命さをアピールする努力はコーチの戦略の一つとして大切なものだと思う。実際にチーム育成を目指すと、資金づくりは必然的な問題となるからである。関連して、今の日本には純粋なアマチュアが不在であるということを訴える(わからせる)ことも必要である。

[コーチ：山田重雄]

1. 役割取得に関する社会的条件

(1) 家族の影響、雰囲気

生家では、戦時中だったので「スポーツ」の雰囲気などどこにもなかった。養家は、裕福ではあったが、特別奨励されるということはなかったが、ただ、養子ということで肩身が狭く、スポーツに打ち込んで頂点をめざすことが自分にとって絶好の自己発揮の場となったことはたしかで、養母はこれに非常に理解を示してくれた。

(2) 集団・組織・他者の影響など

藤枝東高等学校(出身校)は当時からサッカーの名門で、その雰囲気がバレーボールの全国大会やオリンピックということの輪郭づくりをしてくれた。他者では、八王子二中の小峰康貞先生、三鷹高校教員時代に知った中村高校(東京)の渡辺先生、久喜高校(埼玉)の稻山先生、それから前田豊氏や東京オリンピックのときの大松博文監督などに影響されたと思う。一流コーチになってからは、ソ連女子バレー監督のギビ・アフレジアーニ監督や松平康隆氏など。

2. 役割遂行の経済的・物質的条件

(1) 時間について

ほとんどの時間(年間360日くらい)を練習に費している。わずかだが、残りの日数は、スカウト活動などに充てている。

(2) 経費について

会社(日立)の予算で、ほとんどのことをやる。また、少女バレー(山田塾=ロサンゼ

ルス・エンジェルス)の指導では、年間300万ほどの出費があるが、会社等からの援助はなく、日立バレー部の方も月あたり10~15万ぐらいはポケットマネーでまかなっている。

(3) 報酬について

具体的な報酬は、皆無である。

3. 精神的信条と価値観について

(1) 日常生活のモットー

ア。「努力」(父親=実父=の影響が強いようだ)。

イ. 勝ちたい、負けて悔しい、という気持ちを大切にする。

(2) スポーツ指導におけるモットー

一言で言えば、「女権の尊重」ということである。試合になれば監督というものは、ほとんど見ているだけであり、他国の選手は女性が強い社会の中で育ってきているので、日本も女権を確立して、自立した選手を育てなければ、勝つことはできないと考える。また、こういう考え方=「俺について来い」式の、旧来の紡績各社のバレーの非近代的なしうちに対する挑戦でもあると思っている。

4. 選手との関わりかた

(1) 選手との出会いについて

偶然の出会いというの少ない。選手を自分の目で確かめ、自分の足で訪ね、自分から出会いを求めていく。他人を媒介とした出会いは嫌いである。

(2) 可能性の発見と開発

バレーにおける高さ(身長175cm以上、指高225cm以上、トップポイント290cm以上)が、選手にとっての基本的条件である。これを備えていなければあとは努力の問題だ、というのが基本的考え方である。

(3) 時間的結びつき

寝るとき以外、ほとんどの時間を選手と過ごしている。

(4) 経済的関係

ア. 寄…会社のもので、寮費は一般社員と同額(月3250円)

イ. 食事…食事は原則として自分たちで出す。
強化合宿時などは会社から援助が出ることがある。

ウ. その他…くつ下など若干をのぞいては用意してやるが、ただし、非常に質素にさせている。

(5) 他のコーチ・選手達との関係について

ア. コーチ(3~4人)について

コーチの格付けは、選手より下。野球でいえばピッティングマシンのような機会・道具的な存在である。女尊男卑をはっきりさせている。(ボスは一人しか必要ないと考えている。)

イ. 選手について

原則的には、監督と選手は平等。年齢的には52歳~20歳前後ということで、父娘のようなものだ。

(6) 選手の生活管理について

ア. マスコミ等への対応

取材にはできるだけ応ずるが、それ以上の付き合いはせず、一線を画すようにしている。またファンレターなどについては、選手の常識にまかせる。

イ. 自チーム以外の会合への参加

時間がないので参加しないが、そういう場に出ての研修も必要と思う。

ウ. 異性との交際について

バレーにマイナスにならず、よりはげみになるつき合いならよいと考え、とくにうるさくいうことはない。また年令相応になれば結婚のことも考えるし、江上などに見合いの話があればそのつどさせている。

エ. 身心のコンディションについて

普段は、体重に対するアドバイス、消燈時間、年に2回の定期検診のことを言ったり、栄養士を頼むなどのことをしたりしている。

オ. 生活態度一般をめぐって

毎日朝礼をやり、全国から注目されているのだからと、日常の生活態度をやかましく言っている。

カ. 生活上のトラブルをめぐって
選手間のトラブルには積極的に入っていない。

キ. 統制型か指導型か放任型か
場合によってすべてのタイプがあてはまるであろう。

ク. 練習等の計画

すべて自分が計画。その基盤は、18~19歳ごろからのコーチ経験と、相手チームの統計的データである。

ケ. リーダーシップのタイプ

カリスマ的・サポーター型・科学型・信念型…すべてのタイプがあてはまるのではないか。要するに部員に山田のタイプはと尋ねれば、答は各人各様であろうと思う。強いて言えば、最近の自分は信念型(女子バレーを世界の頂点に、という信念)であろうか。

コ. 選手の人間形成について

「バレー馬鹿」にだけはなるな、常識がわかる人、知的にも道徳的にも、ものを考える力を持てるように、とやかましく言っている。

5. 職場でのあなたの立場

20年間、会社の嘱託という不安定な位置にいる。

6. コーチとしての役割意識について

(1) 長所と短所

ア. 長所

- ① バレーがどうしようもなく好きであり、他に趣味らしい趣味がない。
- ② 人づき合いが下手で、内向的であり、孤独に耐える力のようなものが備わっている。これが、強いチームを作る上ではプラスになっていると思う。
- ③ 選手の心理や体調を見抜くことができる。誰が何を考え、何を悩んでいるかわかるし、また生理の選手はすぐわかる。

イ. 短所

- ① 体を悪くしたために、ハードな練習に自ら参加できないこと。
- ② 工場(会社)やバレー協会といった男社

- 会のつき合いがなく、勝っても閉鎖的喜びでしかない、というところがある。どこか明るさというものがひとつ欠けているような気がする。
- (2) 練習法・戦法を変えたことがあるか。
以前、アフレジアン監督(ソ連)の研究をし、真似したことがある。
- (3) コーチングのための勉強
24時間、常に考えたり、いろいろな人から話を聞いたりする。研究馬鹿と言えるくらい旺盛な研究心を持ってやっている。
- (4) 選手が低迷したときの態度
すべてのことをやり尽くす。選手を引っ張ろうとするときはとことん引っ張るし、逆に、待つときはひたすら待つ。

6. その他

- (1) 日本のコーチシステムについて
日本のコーチにとって今一番大切なことは、どんな資格を与えられることでもなく、社会的・経済的位置の確保であると思う。
- (2) 選手の補充
自分から出会いを求め、積極的に動く、というやり方で毎年3～4人入部させている。
- (3) 選手の引退の際の配慮について
貴重な経験と実績を持った人たちをもっと活用したり保証したりすることができないのがなげかわしい。
- (4) コーチの仕事と家庭生活・職業生活
家庭に戻れる時間はほとんどなく、妻は“バレー未亡人”などと言っている。
- (5) コーチの役割を遂行する上で最も苦労すること
かつて金メダルを取った人たちが、引退後は不遇な生き方をしているのを見て、選手達はオリンピックの金メダルの向う側を冷めた目で見るようにになってしまい、夢中でオリンピックの夢にとびこんでいかない。この点で非常に悩んでいる。
- (6) コーチとして成功する秘訣
コツはない。そのことに生きがいを感じ、

- 全生活をうちこんでやったから、ひとつの成功をおさめたのではないか。
- (7) 理想のコーチ像について
現在の日本には、理想のコーチ像はないと考えたい。理由は、コーチの身分制度が確立していないからである。
- (8) 一流コーチになるための条件
「本能」、「科学する力」、「人間性」(負けん気、向上心、人柄のよさ、など)、「選手との出会いとそれを求める姿勢」、「企業に協力させる手腕」など。
- (9) 選手を他のコーチにつけたり、他の選手をひきうけることについて
こういうことをやると独占欲のようなものがでてきてしまうし、預かる側になってしまっても、スパイのようなことをする選手もいるし、あまり歓迎することではない。
- (10) コーチとして、選手の存在とは
「宝」、「家族」、「人生においてかけがえのない人々」

II. サッカー

〔コーチ：岡野俊一郎〕

1. サッカーとの出会い

父が野球に熱心で(軟式野球チームをもつ)親類まで含めて無類のスポーツ一家であった。スポーツに対する理解は大いにあり、奨励的な雰囲気であった。そんな環境の中で、小学校までは水泳・スキー・野球を経験していたがサッカーは全く知らなかった。中学校の校技がサッカーであり、そこで初めてサッカーと出会った。以来、五中＝小石川高校(都優勝数回)一東大(3年時インターナショナル優勝、全日本メンバー入り、4年時主将)を通じてサッカーに親しんだ。

2. コーチへの歩み

- 昭和34年 日本協会のコーチングスタッフへ、しかし理論の食い違いから主に審判をしていった。
(国際審判候補、1級審判員)
- 昭和35年 高校選抜の監督となる。この当時のメンバーが、釜本、横山、杉山ら五輪の主力になった。

昭和35年 オリンピック関係で協会がドイツから招いたクラマー氏のアシスタントコーチ兼通訳として働く。

昭和36年 1月～3月ドイツのクラマー氏のもとでコーチの勉強。

昭和38年～45年 長沼監督のもとで全日本のコーチとして働く。

3. 影響を受けた人物

クラマー氏(ドイツから来日)である。

彼はスポーツをしっかりと把握していたし、技術を実際にやってみせて、その理論的裏付けをもっていた。彼の伝えたものこそまさに、コーチ学であったと言える。決して体験中心主義(日本のスポーツ関係者)の“コーチ術”ではなく、コーチとしてなすべきことを網羅していた。それにはスポーツ医学、スポーツ心理学、組織論、人づき合い etc が含まれていた。

4. 岡野式指導の科学性について

それ以前の指導には1つ1つの技術に理論的裏付けが全くなかったが、私はクラマー氏の理論を自分なりに教えていったので、他からは科学的と言われたのだろう。また自然科学に興味があったため(東大の心理学出身)分析に関するデータを少少読むことができたということもあるだろう。

5. 個性とチームワークについて

チームワークの核は目標に対するメンバーの意志の統一である。メキシコ五輪当時はメンバーの個性は確かに非常に強かったが、選手の個性よりも共通の意識(我々が日本サッカー界を背負うんだという気持ち)の方が、はるかに強かった。また、クラマー氏のために俺たちは頑張るんだという強い意志の統一があったと言えよう。

6. 望ましいトレーニングについて

(1) トレーニングカリキュラムは個別であるべきだ。

機能面、身体(形態)面の個人差や特徴を考慮すべきであり、個々人のもつ能力を最大限に生かすトレーニングが必要である。現在の画一的トレーニングはマンネリ化につながるばかりか単なるロボットを作るに過ぎない。

(2) 選手に要求すること。

正確な判断力、判断を実現する技術、技術を保

つ体力、更に集中力と思考力である。

7. スポーツに対する考え方

(1) スポーツにも哲学が必要である。

人が生きていくうえでのスポーツの意義のみつめ方が重要になってくる。

(2) スポーツは文化である。

(3) サッカー(スポーツ)はプレイである。一プレイ論支持

競技スポーツには年齢的限界があり、またスポーツが即、生命延長には直結しないのに何故人々はスポーツをするのか？それは楽しさがあるからだ。つまり、やってよかったという気持ちがあるということだ。時間的制限がありながらも人々を駆り立てる楽しさがあればこそプレイの世界だと言える。

8. コーチにとって大切なものの

(1) 数多くの新しい広い知識

(2) コーチとしての勉強・努力

(3) 情報の収集と選手への提供

(4) 人間関係のつくり方(情報源 etc)

(5) PR能力(マスコミの利用法 etc)

(6) 選手の才能の発掘

(7) 役割論の線引きに関する考え方

(チーム指導のみがコーチなのか)

これらをもって自分の指導法を創り出す努力をしていく必要がある。そうすることで選手の安心感の維持を図り、目標に対する共通の強い意識をもたせることができる。

9. コーチシステムについて

(1) サッカーに関して

良い点は、日本の場合、参加者や指導者がよくて、指導者の意志の統一ができやすいこと。悪い点としては、まず、講習会(指導者)に出席しただけで終わってしまって発展性がみられず天狗になるケースが多いこと。更には新しいもののみを追い求め過ぎる傾向があり、自分の判断がなされていない点が挙げられよう。とにかく、指導者が自分の指導法を創り出す努力をすることが望まれる。

(2) 体協に関して

スポーツの社会的評価の向上に努めることが先決である。それはスポーツの地位向上やスポーツ指導者の社会的地位の向上に直接に関わってくる

重要なことである。

3. 海外派遣コーチのみた海外の事情

(1) 全体的まとめ

I 海外一流コーチの社会的背景

1. “コーチ”という確固とした社会的基盤があり、財政的な援助と明るい将来がある。

2. コーチ養成(コーチング学を含む専門的研究)が本格的に実施されている。

3. コーチング・システムがオープンな体制であり、選手は常により良いコーチを求めて自由にコーチを選択できる。つまりコーチとすれば常に自分のコーチングを洗練されたものにすることを厳しく求められる。

II 海外一流選手の養成

1. 一流コーチと同様に社会的に保証されている。例えば、学費免除制や引退後・卒業後の就職など。

2. 練習が科学的かつ合理的であること。練習の計画性、また選手個人の自由性の尊重なども挙げられる。

III わが国一流コーチの社会的背景

1. 海外の場合と違って社会的に保証されておらず(地位・経済)、コーチに専念することが困難である。

2. コーチとしての資格や免許が優先し実際の質が低い。

3. コーチ養成の専門機関がなく、コーチの多くはその種目出身のために経験主義的な指導傾向がみられる。

4. コーチの分業制(プロジェクトチーム体制)が欠如しており、コーチ一人が選手のすべてを担当している状態である。例えば、米国女子プロテニスのナブラチロワには、トレーニングコーチ、技術コーチ、栄養面のコーチと3人のスペシャリストがそれぞれの領域を担当している。日本にはこうした体制が欠如している。

(2) 面接対象別面接内容

I. 海外一流コーチの社会的背景

○田口信教(水泳)……アメリカ派遣

(1) コーチの給与

水泳はコーチとして給料を得るのに、手っとり早い競技である。その理由の1つは、水泳がカレッジスポーツのメイン競技のためであろう。

コーチの給与は、NCAAのチャンピオンもしくは国内で10位以内程度の選手のコーチであれば年間3万～5万ドルぐらいである。

(2) コーチの契約

実力社会のため、コーチは選手を育てた実績をもって、自己を売りこみ、なるべく有利な条件で契約をしようとする。

(3) 大学体育局予算コーチ

大学体育局予算の約3分の1がOBからの寄付のため、コーチ獲得への影響も強い。

他の3分の1は、入場料収入のためのショーマンディレクター的能力(大会企画・運営・パンフレットなど)もコーチの実力の一部である。

(4) コーチと選手

日本では、コーチと選手は師弟関係だが、アメリカでは両者が同格、もしくはコーチが下で選手を押し上げている。すなわち客(選手)に物(技術)を売るのであり、「泳いでいただいている」という面もある。

(5) コーチへの希望

コーチはショーマンとして、格好いい職業であり、コーチになりたいという希望はとても強い。

通常は、高校の先生が自校のプールを使って、スイミングスクールを始め、それがクラブをつくり、そこで選手を育て名を挙げていく。最後に目指すのは大学のコーチである。

○古沢久雄 (バレーボール)…ブルガリア派遣

(1) コーチの社会的地位

社会主義国家のために、コーチも準国家公務員的である。

ナショナルチーム・一部リーグ所属チームのコーチでは、給与・社会的地位など一般国民に比してはるかに高い。

(2) コーチの養成

養成のルートには2種類あり、トップレベルの選手が現役を引退してコーチになる場合と、学生時代からコーチングを専門に研究、学習し、実践

を重ねていくものとがある。

この両者をうまくタイアップさせ、各々の不足を補おうと努力している。

スポーツ教育は、小学校時代から一般教育と並行して行なわれており、コーチ養成のスポーツ学校は、(1)学校体育の教員養成コース、(2)スポーツ学校のコーチ養成コース、(3)リハビリとスポーツ医学の三つに分かれている。

(3) 職業としてのコーチ

コーチは明確な職業であり、日本のように教員と兼務するなどということは考えられない。つまり、指導(コーチング)だけで充分生計を営むことができる。

(4) スポーツマスター

スポーツに関わっている人々が目指すところはスポーツマスターという称号である。これはオリンピック級の選手に限らず、コーチや審判にも与えられる。

スポーツマスターの3分の1ぐらいは、スポーツクラブのコーチになっているが、残りは、スポーツとは無縁の職場で要職についている。

○富安一朗(近代五種)…アメリカ派遣

(1) 近代五種のコーチ

米陸軍と米近代五種協会の共同施設である。近代五種トレーニングセンターには、五種目各々に一人ずつ専門のコーチがいる。

五種目全体を教えるコーチは予算上、置かれていない。同時に今のところそれは必要ない、という判断もある。

フェンシングは、スウェーデン出身者に、水泳はスイミングスクールのコーチに、クロスカントリーは、クロスカントリー協会所属のコーチに依頼し、射撃は陸軍出身者、馬術コーチのみが近代五種出身である。

日本では自衛隊、警視庁などに、五種目全体を教えるコーチがいる。

(2) コーチの給与

水泳とクロスカントリーのコーチは、他に職を持ち、コーチとしての給与は月20万～30万円、他は近代五種協会専属のコーチで月40万～50万円ぐらいである。

(3) コーチの養成

コーチ養成制度は、特になく、各専門種目出身者を育てている。

○本田宗洋(カヌー)…西ドイツ派遣

(1) コーチの内分け

プロコーチであるのは、ナショナルチームのコーチである「ブンデス・トレーナー」4名と、地方のクラブもしくは、ある地方のクラブ全体のコーチである「ランデス・トレーナー」2～3名だけであり、その他の人は、職業を他に持ち勤務終了後コーチに来る。

(2) コーチの給与

給与は、ブンデストレーナーで月に35～40万円、ランデストレーナーは40～45万円であり、ランデストレーナーの方が高い。

その他のコーチが、試合・合宿等で勤務を休むと、給料が引かれるが、その分は、スポーツ援助財団から補助される。

(3) コーチと選手

コーチはクラブに所属しているが、選手はクラブを渡りあるく。選手がコーチを選ぶような感じである。

○藤沢義彦(フェンシング)…フランス派遣

(1) コーチのランク

コーチには、助教師・正教師・教授のランク分けがある。助教師は正教師のアシスタント、正教師が俗に言う「フェンシングの先生」である。教授は、その上に位置し、ナショナルチームのコーチになることができる。

(2) コーチの養成

コーチ養成学校として、以下の三つがある。

①国立スポーツ体育研究所…元ナショナルチームの選手のための正教師・教授養成校、2年制で一年目は正教師コース、二年目は教授コースとなっている。

②ギナーフェンシング学校…フェンシング未経験者でコーチ志願者の学校である。

③軍のスポーツ学校…軍人専門の学校である。

(3) コーチの給与

給与は、助教師はほとんど無く、他に副業を持っている。正教師で1時間80～100フラン(邦貨約3000円、初任給15～16万円)、教授は不明だが最低

でも2万フラン(約60万円)ぐらいであろう。

(4) 国立スポーツ研究所

国立スポーツ研究所は、一流コーチの養成と体育教師の養成が行なわれている。また、一流プレイヤーの合宿も行なわれるが、選手はあくまでも、各地のクラブが基盤である。

II. 海外の一流選手養成について

○田口信教(水泳)…アメリカ派遣

(1) 一流選手の発掘

アメリカでは、主に大学のスカラシップ制度によって選手の発掘を行っている(スカラシップ制度とは、授業料免除や食費・交通費支給などをすることによって選手の生活を金銭的に保証するものである)。

(2) 練習時間・場所・トレーニング法

練習時間は個々ばらばらで、日本みたいに一斉に泳ぎはじめるのではない。また個人の能力に応じた科学的な練習計画によって行なわれている。

(3) 選手のやる気とコーチの態度

コーチは芸術家である。人間というキャンバスを最高のものに仕上げていくという意識があり、その情熱と自負が選手のやる気を育てている。また、選手のやる気もコーチの情熱と自負を育てる。

○古沢久雄(バレーボール)…ブルガリア派遣

(1) 一流選手の発掘

種目別適性テスト、スポーツ学校制度、スポーツドクターによる発育予測などが行なわれている。

(2) 練習時間・場所・トレーニング法

スポーツクラブの英才教育システムによって恵まれた環境にあり、コンピューターの利用によって、科学的なトレーニングがなされている。

トレーニング法の特徴としては、①徹底した計画性、②理論・戦術・実戦の重視、③個別性・自主性の尊重、④管理評価システムによる科学的データの裏づけ、などが挙げられる。

そして、これらは可能性を最大限にひきだすこと、到達目標を維持することを、主眼に行なわれている。

(3) 選手のやる気とコーチの態度

コーチ陣のやる気、態度が選手に大きく影響する。

(4) 選手の生活保証と将来

入門から引退後までの見通しの明るさ(生活保証の完備)が選手の樂天性と意識高揚にプラスになっている。

○富安一朗(近代五種)…アメリカ派遣

(1) 一流選手の発掘

知名度が低いためが、テレビ・新聞などを媒体にしてアピールしている。また、水泳・陸上連盟でも養成する。

シニアの場合は軍人から選抜してくるのがほとんどである。

(2) 練習時間・場所・トレーニング法

練習はトレーニングセンターで6日／週、7：30～16：30まで、3～4種目／日である。コーチは各専門の者が指導している。

世界のトップをめざしているために、トレーニングは上位の者だけで行なわれている。

(3) 選手の生活保証と将来

生活保証、就職のあっせんなどはないので引退後、就職できらうに自ら、勉強している。

○本田宗洋(カヌー)…西ドイツ派遣

(1) 一流選手の発掘

主に、10歳～15歳でカヌーが始められるため、幼い時からの養成はない。

ジュニア選手権の上位入賞者からピックアップする。

(2) 練習時間・場所・トレーニング法

トレーニング法は、内容的にたいして変わりないが、お金がかかっている。

電動流水漕などを用いて、科学的合理的方法でトレーニングを行っている。

(3) 選手のやる気

グループ毎のバラバラの練習のため、選手が自主的にやる気をもって行える。

(4) 選手の生活保証と将来

引退後の特別な生活保証はないが、現役時代(一流選手)に限り、援助がある。

○藤決義彦(フェンシング)…フランス派遣

(1) 一流選手の発掘

7～16歳までの試合の年度末の結果を集計し、ランク付けをし、それをもとにナショナルチームを決める。

また、身体能力検査・体格検査・試合結果なども用いている。

(2) 練習時間・場所・トレーニング法

スポーツ研究所に合宿し、そこから学校へ通うという生活をし、練習は午前、午後二時間づつ行う。加えて、毎週二回夜、自分のクラブでも行っている。

コーチ自身、ナショナルチームと民間クラブを兼ねているために、一日中フェンシングを行っている。

(3) 選手の生活保証

Aチームの中でも生活保証のランクが違うため、必死で頑張っている。

III. わが国の一級コーチの社会的背景と課題

○田口信教(水泳)…アメリカ派遣

(1) 日本のコーチ(養成)制度への所見

体協のコーチ制度(上級コーチ、トレーナーなど)にみられる資格や免許を与えるだけの体制に問題がある。つまり、与えられた“お墨つき”によってではなく、その年々での功績に対する評価があつてもよい。

(2) コーチと選手の結びつきの日本的特性

米国では選手がコーチを選択するオープンな体制があるのでに対して、日本では閉鎖的な側面が強い。

また、米国は選手があって協会があるが、日本の場合、協会があって選手がある感じである。

(3) その他

同じコーチでも少しばかり知識のある人よりも、経験が豊富で選手に魂を入れられるコーチがすごく貴重である。

○古沢久雄(バレーボール)…ブルガリア派遣

(1) 日本のコーチ(養成)制度への所見

日本の場合、他に本業があるので実際問題としてコーチに専念できる人が少ない。

(2) コーチと選手の結びつきの日本的特性

諸外国と比較するとコーチの指導力の違いが挙げられる。日本は過去の栄光にすがっている傾向が強いが、コーチの努力を見せていくことで選手を魅きつけていくことが必要だろう。

(3) その他

チームスポーツの場合、みんなが一つになって

やるんだという意識が強すぎてロスが多く、キメの細かさが出て来ない傾向にある。

日本の場合、全てをコーチが背負って悩んでいる感じだが、もっと様々な人々を総動員して技術向上に取り組む姿勢が必要でないか。

そういう組織作りが必要だと思う。

○富安一朗(近代五種)…アメリカ派遣

(1) 日本のコーチ(養成)制度への所見

競技人口が少ないために、コーチの絶対数が不足しており、コーチの養成がこれからの問題である。

また、近代五種全般にわたってコーチできる人が殆んど居らず、各々の専門種目のコーチを依頼しているのが現状である。

(2) コーチと選手の結びつきの日本的特性

選手、コーチは自衛隊、警察などで合宿形態をとっているので、選手とコーチとの結びつきが強い。

(3) その他

射撃などは技能の習得にかなりの時間(1~2年)かかり、また金銭的にも負担が大きい。このように競技的特性に問題がある。

○本田宗洋(カヌー)…西ドイツ派遣

(1) 日本のコーチ(養成)制度への所見

実際に合宿などをしてコーチをすることのできる人が殆んどいない現状である。

(2) コーチと選手の結びつきの日本的特性

コーチの在り方に関しては、頑張りを見せるなど、選手と同じ姿勢がほしい。

(3) その他

練習場所・船置場の確保などの問題がある。また、選手層の中心が学生であり、大学以外では練習の機会もないという現状から大規模な組織づくりが今後の課題となる。

○藤沢義彦(フェンシング)…フランス派遣

(1) 日本のコーチ(養成)制度への所見

専門の養成機関がないためコーチの100%が学生時代の経験者である。そのため経験のみで教えるという弊害が出てしまう。科学的裏付けをもったコーチ学が必要であろう。

(2) その他

日本の場合、自らの殻の中にこもってしまいがちであるが、失敗を恐れずに殻を破ることの重要性を認識するべきである。

4. 記者クラブのみた日本のコーチ事情

(1) 全般的まとめの内容

I 一流選手養成(発掘も含めて)について

1. 選手発掘の学校依存に問題がある。

ア. 発掘が学校単位で組織的でない。

イ. 入試制度による弊害がある。

ウ. 学校制度(6・3・3・4)が一貫指導の障害となっている。

エ. 学校教育という重荷を背負っていかねばならない。

2. 日本人のスポーツ観に問題がある。

ア. 単一種目に偏り過ぎることで逆に選手の可能性を限定している。

イ. クラブ間に閉鎖性がみられ、他のクラブへの転向を否定的に捉える傾向がある。

II 日本のコーチ特性

1. よいコーチとは、科学性と哲学(ものの考え方の根本)とをもったコーチを言うのだが、日本のコーチの場合は科学性に欠けるのではないか。

2. コーチング・プロジェクトが欠如している。

3. 財政的に不安定的であり、コーチの社会的・経済的裏付けを確保すべきである。

III 練習について

1. 長時間の練習をしても競技力が向上していない。この原因としては、基礎的トレーニングの重視による実践的トレーニングの不足が考えられる。もっと量より質を求めて創意工夫をすべきである。

2. 地域スポーツ施設では地域スポーツクラブと競技スポーツとの接点がない。

IV スポーツの社会的地位について

1. スポーツの社会的意義の認め方が問題である。日本の場合、文部省のもとでスポーツが展開されているが、教育の枠の中だけでスポーツを捉えるのはおかしい。

V その他

1. スポーツ科学研究と実践(コーチング)との接点がみられない。これはコーチが実際にどの程度

まで科学を信頼して取り入れるかにかかっている。

2. コーチと選手の上下関係(師弟関係)に問題がある。

ア. 選手はコーチの言いなりになっており、自主性が欠如している。

イ. 両者間の討論が不足しており、もっとコミュニケーションをとるべきである。

ウ. 日本の場合、練習では常にコーチが上で選手が下、また社会的評価は選手が上でコーチが下、つまり選手の方が日の当たる道を歩んでいる。しかし欧米ではその逆になっている。つまりコーチの方が社会的に認められているのである。

(2) 面接対象別面接内容

I 一流選手養成について

C: 選手の発掘のためには、対象年齢の範囲を下げることと、発掘のための正確な眼が必要である。

実際のところスポーツ少年団がその責任(役割)を果すべきなのだが、指導者にその眼力があるのか、また現実問題としてはかなりむずかしいのでは、と考えられる。

A: 発掘において、種目の偏りがみられる。日本ではスポーツが学校体育を中心に発達してきたため、その弊害が出ていると思われる。

選手発掘の段階で学校レベルで求めざるを得ないということが、指導の一貫性の欠如につながっている。

B: アジア大会(ニューデリー)参加選手の調査でも一貫した指導の欠如はデータとして出てきている。ただし、クラブ制度の充実している水泳や体操などは例外である。

例えば中国では、全国に2000校余りある体育学校で、5歳~大学卒業後までの一貫した指導がなされている。日本も何らかの形でこういったシステムがあればよいが、国策の違いがあって仲々むずかしい問題であろう。

E: その対応策として行なわれている例が山田氏のバレー学校であろう。他にも高校野球などで個人が私財を投げる形では行なわれている。

トップコーチが自らの眼で発掘することが大切であるが、日本の場合、発掘は個人レベルがせいぜいであり、それを制度として作っていくことが課題である。

D：中学、高校、大学のそれぞれの期間でそれぞれが日本一を目指すという意識が強い。別に日本一を目指さなくとも、この段階ではこのレベルまで達すればよいという指導の一貫性があれば結構だと思う。それでなければそれぞれ(中・高・大)で伸びが止められて可能性を失うことにつながる。

A：やはり歴史的な学校制度の根強さが弊害である。実際は地域のスポーツクラブで専属コーチの指導の下に練習していながら、大会参加は学校運動部であるという例が多い。

E：日本人のスポーツ観として、1つのスポーツ(種目)に打ち込み過ぎを良しとする傾向があるのではないか。人間には様々な可能性があるので色々な種目の中から適性を見出す姿勢があってもよいと思う。

これも学校制度の弊害の1つである。つまり、ある1つの運動部としての眼でしか人材を見ることができないということである。

また、低年齢化というのはその反面で優れた人材を早くから狭く限定してしまう危険性をはらんでいる。

A：その点でアメリカのシーズン制を見習う必要があるだろう。日本はとにかく偏り過ぎである。

D：1つの競技種目で芽を出さなくとも他に可能性を見出すべきである。例えば陸上短距離の宮崎選手(野球出身)のように。

日本の場合、特に学校の中など他のスポーツの素質がありながら他へ移ることを良しとしない雰囲気や風潮があるのが問題である。

D：コーチと選手との運命的な出会いというものの不思議さを感じる。結局、その出会いを生かして選手の可能性をどこまで伸ばしていくかがキーポイントである。しかし、現在ではその貴重な出会いの機会すらも入試制度の制約をかなり受けている。

E：学校内でのクラブ間の閉鎖性が素材をだめにしている。あるクラブから他のクラブへの転向

を許さないという独特的な雰囲気がよくない。この意味でのオープンシステムが必要であろう。

2 日本のコーチの特性について

D：よいコーチの条件としては、独自のスポーツ哲学をもっていることである。確かにコーチは技術指導も必要だが、所謂ものの考え方の根本を教え授けることのできる人が、コーチとしてはすばらしいと思う。

B：コーチには学者風の「カリスマ的コーチ」と理論的裏付けをもった「理論的コーチ」の二通りがあるのではないか。

A：日本のコーチングにおいて経験主義と科学主義の問題は賛否両論あるが、女性の生理問題や増田選手のダウンをめぐる問題などを考えると、ある程度科学的トレーニングが重要でないか。

D：その点、欧米諸国は所謂科学的になっていて、専任コーチ、アシスタント、アドバイザーなどのプロジェクトチームを中心として1つの体系をなしている。ところが日本の場合、これらすべてを1人のコーチがこなしているのが現状で、結局コーチ自身がどこまで勉強するかに左右されることになる。

B：理想的な形は選手がコーチの言うことを信ずる体制である。その場合は、過去の実績・情熱・科学的裏付けから生まれる信頼関係が望ましい。

A：日本に良いコーチが生まれるのは、コーチがその道で生計を立てられない経済的背景がある。従って充分勉強ができないという環境的な問題が良いコーチの出ない理由として考えられる。

日本の場合、コーチを支えているのは情熱だけである。

E：日本にはプロ・コーチが少ない。中学高校時代ならば先生の情熱のみでも勝てるが国際レベルになると、単なる情熱のみでは勝てなくなる。そこには、しっかりとした社会的基盤が必要になってくる。

A：コーチの社会的評価が低いということの現れだろう。

3 練習量などについて

A：日本のバレーボールの練習量はとにかくすごい。

D：殆んど一日中練習している状態だろう。日

本の選手は練習量では諸外国に負けてはいない。
しかし量より質ではないだろうか。

C：技術的な練習は長時間必要ないかも知れないが、チームスポーツの特にコンビネーションなどは長時間かけてるべきではないだろうか。

A：日本人の場合、コーチの言う通りにただ練習をこなしていれば安心という感覚がある。これは国民性かもしれないが…。

B：アジア大会参加メンバーの調査結果からも、基礎的トレーニングよりも実戦場面を取り入れたトレーニングの方が好きだ、という結果が出ている。

嫌いな内容のトレーニングを精神的にどう導びくかでかなり違うと思う。

A：指導環境の問題もあるだろう。施設を有効に活用する工夫も必要である。選手ばかりかコーチ側にも工夫がない。

D：練習はコートやグラウンドのみではないという意識がほしい。例えば釜本選手は人ごみを利用したボディコントロールの練習をしたり、横山選手は1日中、動物園の中のヒョウを観て練習したりした。

E：日本選手のゲームでの対応力のなさは実践練習の不足が原因ではないだろうか。この理由としては基礎体力不足のための基礎的トレーニングに時間をとられてしまうことが挙げられる。

またコーチの勉強不足や日本のコーチと科学データとの接点の問題も関係していると思われる。

4 スポーツの社会的意義の認め方について

B：日本におけるスポーツの社会的地位の低さは、諸外国との国家体制の違いによるところが大きいと思われる。中国はスポーツを国策としているし、韓国はスポーツエリート優先のシステム（兵役免除など）を採用している。

A：日本の場合、スポーツが文部省の下にあることが問題である。独立した“スポーツ省”が必要である。常に教育という重荷を背負うことになっているのが現状である。

A：また、コーチや選手の将来の身分保証が確保されていない。

B：教員・学生は例外として、一般企業に属する選手やコーチは、身分保証の問題もあって安心し

て海外派遣の制度に参加できないのが現状である。これも日本におけるスポーツの位置の低さを象徴している。

A：海外でみっちり学んだはずのコーチがいざ帰国すると、まず職探しに走り回るといった例も珍しくない。これでは、海外に出てコーチの勉強に励めという方が無理があるというものだ。

5 その他

B：スプロ研で出しているデータと実際のコーチングとの接点はあるのだろうか。

A：日本の選手やコーチの間での科学理論をめぐる討論も殆んどないのではないか。

C：科学面でのコーチの知識の有無は、その関係の書物を読んでいるか否かにかかっている状態だろう。日本のコーチは、一般に科学的知識に弱いようだ。勉強が足りない。

C：また、日本の選手は、過保護で創造力が弱いともいわれる。国内での記録を海外で更新するどころか、自分自身のコンディショニングすらできない。監督、コーチにすべてを任せている状態だ。また、社会的プレッシャーにも弱い。

D：コーチと選手との討論が殆んどないのが問題だ。選手自身のたくましさが必要だ。例えば、海外での試合に単独で手続きして出場してみるとか……これは民族的特質もあろうが……。とにかく常に集団（選手団）としてしか動けないというよう、コーチの言いなり（人形的）な選手が多過ぎる。

A：選手養成に関連して、特にわが国の中学校では、百貨店なみの部の数があり、そこで少ない人材を取り合うのだから、よい素材が育つはずがない。

C：また、地方自治体のスポーツ施設もあることはあるが、殆んど社会体育専門でスポーツクラブ制度との結びつきがない。さらにそこから一流選手を育てようというムードも全くない。

E：学校のクラブ数が多い上に、クラブ間の再生というか融通性がまるでないのが問題だ。ひとつのスポーツから移ろうとすると、むしろ、「ダメなやつ」というレッテルをはられてしまう。

また、野球熱がプロ野球に支えられていることからもわかるように、プロスポーツがあるか否か

でかなりスポーツの充実度も違っているのではないか。
いだろうか。

B：素材の発掘に関しては、全国規模の発掘システムが必要である。(もちろん、資金援助が条件だ
が。)

A：発掘システムと同時に、選手に対する優遇制
度(学費免除制など)も必要である。とにかく、エ
リート養成には金がかかるものだ。

B：金銭的な面は、体協やJOCなどが財源をいか
に確保するかにかかっていると思われる。それも

体協の使命ではないか。企業や団体を中心に行な
っていくべきだ。スポーツエリート養成、素材の
発掘にはやはり金が要るものだ。そういう時代の
流れを無視するべきではない。

E：その点で、施設面の充実も問題だ。施設自体
は各々ちゃんとあるのだが、まとまったトレーニ
ングセンターとして成り立っているものがない。
現在ある施設をいかに機能的に使うかが問題だと
思う。

一流コーチの社会的背景に関する アンケート調査

－昭和58年10月調べ－

日本体育協会スポーツ科学委員会

委員長 黒田 善雄

日本体育協会競技力向上委員会

委員長 福山 信義

わが国一流コーチの社会的背景と意識に関する研究班

研究班長 三条 野豊

記入上の注意

- 回答は、特別の指示のない限り、□の中からあてはまるものを選びその番号を○で囲でください。回答欄がある場合は、あてはまる番号を欄内に記入して下さい。
- 設問中に用いられる専門的な用語は次のようにご理解ください。
 - 現役……………あなたの競技生活のうち、競技選手として活躍または充実していた時期をさす。
 - 引退……………いわゆる第一線を退き、競技生活によって職業生活、家庭生活等を犠牲にしなくなった状態をさす。
 - 公認コーチ………体育協会から認定されたコーチをさし、以下の1～5に分類します。重複する方には、番号の若い方のコーチの立場としてお答え下さい。

1. 主任強化コーチ	4. 上級コーチ
2. 強化コーチ	5. コーチ
3. ジュニアコーチ	
- 特別の指示のない限り、公認コーチとしての立場でお答えください。

1 2 3 4 5 6 7

--	--	--	--	--	--	--

I. あなた自身のことについてお知らせください。

Col. 1 = 1

F-1. 性別 1. 男, 2. 女 (9)

F-2. 年令 才 (10) (11)

F-3. あなた自身と父親(主たる保護者)の学歴(それぞれ番号を選んで□内に記入してください)。

- 1. 中学校卒(旧制高等小学校卒も含む)
- 2. 高等学校卒(旧制の中学校・実業学校卒なども含む)
- 3. 短期大学卒(旧制の高等学校・専門学校卒なども含む)
- 4. 大学卒
- 5. 大学院修了

(1)あなた自身 (12)

(2)父親(主たる保護者) (13)

F-4. あなたの父親(主たる保護者)の主な職業

- 1. 専門・技術的職業(研究者、技術者、教員、自由業など)
- 2. 管理的職業(会社役員、団体役員など)
- 3. 自営業(商業、工業、サービス業など)
- 4. 事務系の仕事
- 5. 販売系の仕事
- 6. 労働系の仕事
- 7. 農林漁業
- 8. その他()

注. 公官庁、企業に勤務している場合でも、1.2.4.5.6.の内から選んで下さい。

(14)

F-5. あなたの現在の職業(名刺に用いるように具体的にお知らせください)。

(15) (16) (17)

II. あなた自身が現役の競技選手であった頃のことについてお知らせください。

Q-1. あなたが出場した大会の中で、最も高いレベル（成績も含む）をお知らせください。

レベルは、1から11の番号順で、1が最高レベルであるとお考えください。

- | | |
|-------------------------------------|---------|
| 1. オリンピック・世界選手権レベルの大会 | (メダル獲得) |
| 2. オリンピック・世界選手権レベルの大会 | (入賞) |
| 3. オリンピック・世界選手権レベルの大会 | (参加) |
| 4. アジア大会や数ヶ国対抗形式の国際レベルの大会 | (入賞) |
| 5. アジア大会や数ヶ国対抗形式の国際レベルの大会 | (参加) |
| 6. 日本選手権、国体レベル（インカレ、インターハイも含む）の大会 | |
| | (1位) |
| 7. 日本選手権、国体レベル（インカレ、インターハイも含む）の大会 | |
| | (入賞) |
| 8. 日本選手権、国体レベル（インカレ、インターハイも含む）の大会 | |
| | (参加) |
| 9. その他の全国レベルの大会（実業団、教員大会など） | |
| 10. 地域ブロックレベルの大会（4、5、6の予選大会や地方大会など） | |
| 11. 県、市町村レベルの大会 | |

(21) (22)

Q-2. あなたが代表選手に選抜された最も高いレベルに○印をつけて、その代表選手として出場した大会回数を□内に記入してください。

- | | | | |
|----------|--------------------------|----------|--------------------------|
| 1. 全日本代表 | <input type="checkbox"/> | 5. 地区選抜 | <input type="checkbox"/> |
| 2. 日本選抜 | <input type="checkbox"/> | 6. 県選抜 | <input type="checkbox"/> |
| 3. 実業団選抜 | <input type="checkbox"/> | 7. 市町村選抜 | <input type="checkbox"/> |
| 4. 学生選抜 | <input type="checkbox"/> | | |

(23) — (24) (25)

Q－3. あなたは、現役時代の最盛期にはどのようにして練習するタイプでしたか。

あなたにいちばん近いタイプを選んでください。

1. 自分自身で、考えたり工夫したりしながら練習するタイプ
2. 仲間と考えたり、工夫したりしながら練習するタイプ
3. 顧問や監督が決めた練習計画にそって練習するタイプ
4. 考えたり工夫したりするよりも、全力をつくして練習するタイプ
5. その他（具体的に）

(26)

Q－4. あなたが現役時代の頃の部・クラブは主にどういう雰囲気（ムード）でしたか。

1. 練習中も、練習でない時もきびしかった
2. 練習中はきびしいが、練習でない時はなごやかだった
3. 練習中も、練習でない時もなごやかだった

(27)

Q－5. Q－4で答えた雰囲気（ムード）に対して、あなたは満足していましたか。

1. 非常に満足していた
2. 満足していた
3. どちらともいえない
4. 不満であった
5. 非常に不満であった

(28)

Q-6. あなたは、Q-1で答えた現役時代の最盛期において、指導者から指導を受けていましたか。

- 1. 指導者がいたので、いつも受けていた。
- 2. 指導者がいたので、ときどき受けていた
- 3. 指導者がいたが、あまり受けなかった
- 4. 指導者がいなかったので受けられなかった

(29)

(SQ-1～3にお答えください。)

— SQ-1. その指導者に指導を受けていたのは、あなたが何歳ごろでしたか。

- | | |
|-----------|-----------|
| 1. 12歳以下 | 5. 23～26歳 |
| 2. 13～15歳 | 6. 27～30歳 |
| 3. 16～18歳 | 7. 31～40歳 |
| 4. 19～22歳 | 8. 41歳以上 |

(30)

— SQ-2. その指導者は指導する際に、何をよりどころに教えるタイプでしたか。
次の中から最もあてはまるタイプをお答えください。

- 1. 指導者のもつ地位や権力などをよりどころに教えるタイプ
- 2. 指導者のもつ専門的な能力や権威をよりどころに教えるタイプ
- 3. 指導者の人柄やクラブ員との人間関係をよりどころに教えるタイプ

(31)

— SQ-3. あなたは当時そのようなタイプの指導者に満足していましたか。

- | | |
|--------------|--------------|
| 1. 非常に満足していた | 4. 不満であった |
| 2. 満足していた | 5. 非常に不満であった |
| 3. どちらともいえない | |

(32)

Q－7. あなたの競技生活年数、指導者に指導を受けていた年数、及び引退してから現在までの年数を、それぞれ具体的な年数をお知らせください。

1. 競技生活年数（初めての試合出場から現役を引退するまでの年数）

_____ 年 (33) (34)

2. 1 の内で指導を受けた年数 _____ 年 (35) (36)

3. 引退後、現在までの年数 _____ 年 (37) (38)

Ⅲ. あなた自身のこれまでのコーチ歴についてお知らせください。

Q－1. あなたが、コーチや監督として指導を始めた時、その選手やチームのレベルはどのくらいでしたか。初めてコーチに就任した時、体協・連盟の公認コーチに就任した時、及び公認コーチとしての現時点の3つの時点ごとにお答えください。

該当する番号を選んで□内に記入してください。

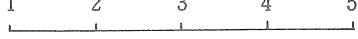
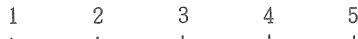
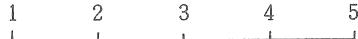
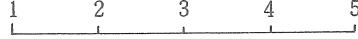
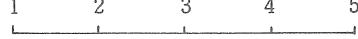
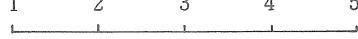
- | | |
|-------------------------------------|---------|
| 1. オリンピック・世界選手権レベルの大会 | (メダル獲得) |
| 2. オリンピック・世界選手権レベルの大会 | (入賞) |
| 3. オリンピック・世界選手権レベルの大会 | (参加) |
| 4. アジア大会や数ヶ国対抗形式の国際レベルの大会 | (入賞) |
| 5. アジア大会や数ヶ国対抗形式の国際レベルの大会 | (参加) |
| 6. 日本選手権、国体レベル(インカレ、インターハイも含む)の大会 | (1位) |
| 7. 日本選手権、国体レベル(インカレ、インターハイも含む)の大会 | (入賞) |
| 8. 日本選手権、国体レベル(インカレ、インターハイも含む)の大会 | (参加) |
| 9. その他の全国レベルの大会(実業団、教員大会など) | |
| 10. 地域ブロックレベルの大会(4、5、6の予選大会や地方大会など) | |
| 11. 県、市町村レベルの大会 | |

- (1) 初めて職場や学校などでコーチに就任した時のレベル ④⓪ ④①
- (2) 公認コーチとして初めて指導担当した時のレベル ④② ④③
- (3) 公認コーチとしての現時点でのレベル ④④ ④⑤

注：初めてコーチに就任した時に、公認コーチに認定されていた方は、(1)、(2)が同じレベルであるので、(1)、(2)は同じ番号となります。

Q-2. あなたが、コーチとして指導するようになったのはどういう理由からですか。

次の(1)～(7)のそれぞれについて、あなたの場合にいちばん近い番号を○で囲んでください。

- | 全お
くり
そ
の
と | そ
と
おり | ど
い
ち
え
ら
な
とい
も | ち
が
う | 全
く
ち
が
う |
|-------------------------|--------------|---------------------------------------|-------------|-----------------------|
| | | | | |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
- (1) スポーツ好きだったから  ④⑥
- (2) 経験を生かしたかったから  ④⑦
- (3) 選手を育ててみたかったから  ④⑧
- (4) 指導者になりたかったから  ④⑨
- (5) 推せんされて  ④⑩
- (6) 他になる人がいなかったから  ④⑪
- (7) 社会に役立ったかったから  ④⑫

Q－3. あなたは、現役時代やコーチに就任する以前に、“自分がコーチになった時には、こんなコーチになってみたい”といったコーチの理想像について考えたことがありますか。

- 1. よく考えることがあった
- 2. ときどき考えることがあった
- 3. あまり考えたことがない
- 4. まったく考えたことがない

(53)

Q－4. あなたは、現在、“あの人のようなコーチになってみたい”というようなモデルとしている、または師事しているコーチをお持ちですか。そのコーチは国内・国外を問いません。

- 1. はい (だれですか)
- 2. いいえ

(54)――(55)(56)

Q－5. あなたが、これまでに一番長く指導してきた部・クラブはどれですか。

- 1. 小・中学校の部・クラブ
- 2. スポーツ少年団
- 3. 高等学校の部・クラブ
- 4. 大学の部・クラブ
- 5. 地域社会のスポーツクラブや同好会
- 6. 職場の部・クラブ
- 7. 選抜や代表の選手やチーム
- 8. その他()

(57)

Q-6. あなたの公認コーチとしてのコーチング時間についてお知らせ下さい。数値は具体的に記入してください。

1. 過去1年間の試合帯同数

国 内	回	日 間	⑤9—⑥0 ⑥1
国 外	回	日 間	⑥3—⑥4 ⑥5

2. 過去1年間の合宿帯同数

国 内	回	日 間	⑥7—⑥8 ⑥9
国 外	回	日 間	⑦1—⑦2 ⑦3

3. 過去1年間の練習帯同日数(2を含めて算出してください)

国 内	回	日 間	⑦5—⑦6 ⑦7
国 外	回	日 間	⑦8—⑦9 ⑧0

Q-7. あなたのコーチ年数をお知らせください。

Col. 1 = 2

(1) コーチ総年数	年	⑤ ⑥
(2) 公認コーチ年数	年	⑦ ⑧

注. 初めてコーチに就任したと同時に、公認コーチであった方は、

(1)、(2)が同じ年数になります。

Q-8. あなたが、指導してきた選手やチームのレベルの最高と最低をお知らせください。また、指導担当期間中に育てた、レベルのいちばん向上した事例をお知らせ下さい。さらに公認コーチとして主に担当するレベルをお知らせください。

- | | |
|---------------------------------------|---------|
| 1. オリンピック・世界選手権レベルの大会 | (メダル獲得) |
| 2. オリンピック・世界選手権レベルの大会 | (入賞) |
| 3. オリンピック・世界選手権レベルの大会 | (参加) |
| 4. アジア大会や数ヶ国対抗形式の国際レベルの大会 | (入賞) |
| 5. アジア大会や数ヶ国対抗形式の国際レベルの大会 | (参加) |
| 6. 日本選手権、国体レベル(インカレ、インターハイも含む)の大会(1位) | |
| 7. 日本選手権、国体レベル(インカレ、インターハイも含む)の大会(入賞) | |
| 8. 日本選手権、国体レベル(インカレ、インターハイも含む)の大会(参加) | |
| 9. その他の全国レベルの大会(実業団、教員大会など) | |
| 10. 地域ブロックレベルの大会(4、5、6の予選大会や地方大会など) | |
| 11. 県、市町村レベルの大会 | |

- (1) 最高レベル (9) (10)
(2) 最低レベル (11) (12)
(3) レベルの向上例 レベルから レベルへ (13) (14) (15) (16)
(4) 主たる担当レベル (17) (18)

注. (3)について、8.レベルを4.レベルに向上した場合に、
⑧ レベルから ④ レベルへと記入してください。

Q-9. あなたは、これまでコーチや監督の立場から世話をてきて、指導者をやめたいと思ったことがありますか。

- | | |
|------------|-------------|
| 1. よくあった | 3. あまりなかった |
| 2. ときどきあった | 4. まったくなかった |

(19)

(1、2、3と回答した方のみお答えください。)

S Q-1. やめたいと思った理由を強い順に2つお知らせください。

1. 健康上の理由で
2. 部員、クラブ員との人間関係がうまくゆかず、まとまらなかったから
3. 指導する時間が十分にとれなかったから
4. 指導体制や指導者間の人間関係がうまくゆかなかったから
5. 施設を思うように利用できなかったから
6. 指導が忙し過ぎて自分の時間がとれなかったから
7. 遠征費などに経費がかかりすぎたから
8. 周囲の理解がなかったから
9. 選手やチームにやる気がなったから
10. 自分のコーチ能力に限界を感じたから
11. その他()

1位

⑩ ⑪

2位

⑫ ⑬

Q-1-0. あなたはこれまで指導してきた選手やチームの成績に満足していますか。また、あなたの自身の指導自体には満足していますか。

- | | |
|--------------|-------------|
| 1. 非常に満足している | 4. 不満である |
| 2. 満足している | 5. 非常に不満である |
| 3. どちらともいえない | |

(1) 選手やチームの成績

⑭

(2) 指導自体

⑮

Q-1-1. あなたが、現在公認コーチとして指導を担当している対象の性別をお知らせください。

- | | | |
|-------|-------|--------|
| 1. 男子 | 2. 女子 | 3. 男女共 |
|-------|-------|--------|

⑯

IV. あなたが現在指導している上での指導条件や環境面について答えてください。

Q-1. あなたが指導しているチームや選手の周囲（例えば職場や学校）は、どういうタイプのところですか。

1. スポーツが盛んで、チームや選手に対しても関心は高い
 2. スポーツは盛んだが、チームや選手に対する関心は低い
 3. スポーツは盛んでないし、関心も低い
 4. その他(

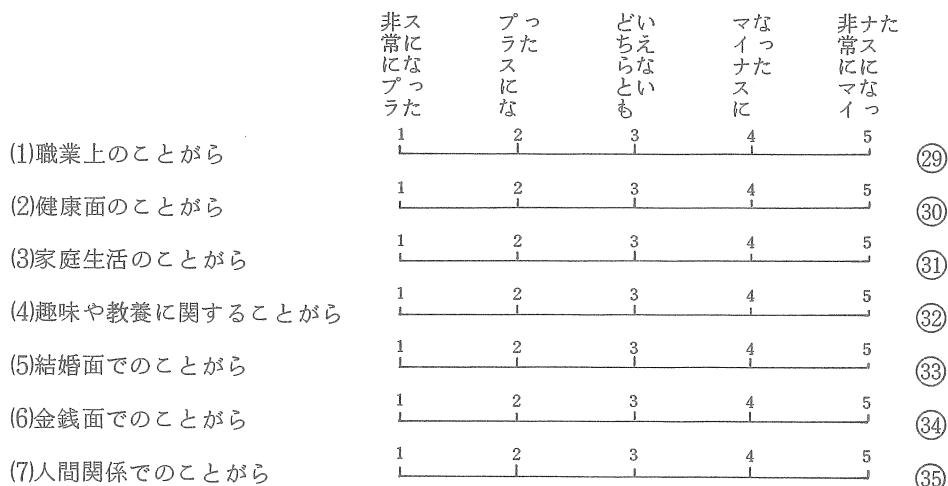
27

Q-2. あなたが指導している部やクラブでは、選手はどのような形で入ってくることが多いですか。

- 選手が自発的に入ってくる
 - 個人的に中学校、高校等の指導者が送り込んでくる
 - 附属学校などからの推せんで入ってくる
 - 選抜選手や代表選手の形で入ってくる
 - 勧誘されて入ってくる
 - その他()

28

Q-3. 今まで指導してきたことが、次の事項について、どのくらいプラスに、ないしはマイナスになりましたか。



V. あなた自身の指導の内容、方法について答えてください。

Q-1. あなた自身は、人に教えることと、することと、どちらが好きですか。

1. 教えることも、自分ですることも好き
2. 自ですることよりも、教える方が好き
3. 教えることよりも、自分ですることが好き
4. わからない

(36)

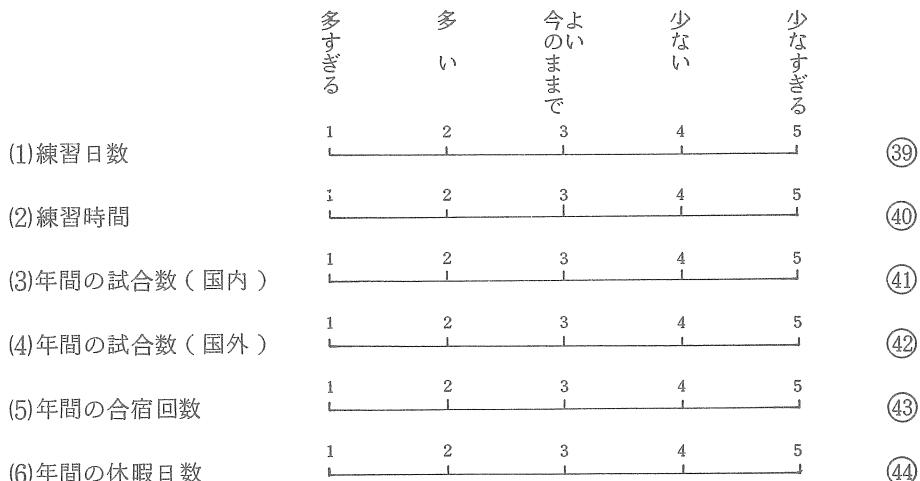
Q-2. 今の部員や選手は、部・クラブのどういう雰囲気（ムード）や人間関係を望んでいると思いますか。また、あなた自身はどれがよいとお思いですか。それについて答えてください。

1. 練習中も、練習でない時もきびしい
2. 練習中はきびしいが、練習のない時はなごやか
3. 練習中も、練習のない時もなごやか
4. わからない

選手の望む 雰囲気	あなたが望 む雰囲気

(37) (38)

Q-3. 一流選手を養成する上での練習日数等について、公認コーチとしてのあなたの判断をお知らせください。



Q-4. 実際に指導する場合は、コーチと選手との関係は言葉によって行われます。下の(1)～(10)に、よく使われる指導上の言葉をあげています。あなたは、指導する上でどの言葉をよく使いますか。それぞれについて「非常によく使う」から「全く使わない」の間で答えてください。

	非使 常う によ く	使 う	使 わ な い	全い く使 わ な い	
(1) 「チームワーク」とか「チームのために」	4 	3 	2 	1 	(45)
(2) 「工夫」とか「考える」	4 	3 	2 	1 	(46)
(3) 「プライド」とか「恥をしれ」	4 	3 	2 	1 	(47)
(4) 「根性」とか「全力」	4 	3 	2 	1 	(48)
(5) 「がんばれ」とか「努力」	4 	3 	2 	1 	(49)
(6) 「リラックス」とか「平常心」	4 	3 	2 	1 	(50)
(7) 「やる気」とか「意欲」	4 	3 	2 	1 	(51)
(8) 「自分のため」とか「個性」	4 	3 	2 	1 	(52)
(9) 「マナー」とか「規律」	4 	3 	2 	1 	(53)
(10) 「人間性」とか「人柄」	4 	3 	2 	1 	(54)
(11) 「勝負は勝たなければ意味がない」	4 	3 	2 	1 	(55)

Q-5. あなたは、これからも公認コーチとして、スポーツの指導をしてゆきたいとお考えですか。

- | | |
|-----------------|-------------|
| 1. ずっとしていきたい | 3. できればやめたい |
| 2. もう少しの間していきたい | 4. すぐにやめたい |

(56)

VI. あなたの日頃考えているスポーツやスポーツ指導のあり方について率直にお答えください。

Q-1. あなたは、「勝つこと」、「フェアープレイをすること」、「ベストを尽くすこと」、「技術をのばすこと」の4項目について、重要視する順に点数を配分してください。

合計が10点になるようにして、0点はつけないでください。同じ点数をつけてもかまいません。

	現役時代	現 在
勝 利	点 (58)	点 (62)
フェアー	点 (59)	点 (63)
ベスト	点 (60)	点 (64)
技 術	点 (61)	点 (65)
	10点	10点

Q-2. あなたは指導者として、どのように練習する選手のタイプが望ましいと思いますか。
また、現在の選手は、どのように練習するタイプが多いですか。それについて答えてください。

1. 自分で考えたり、工夫しながら練習するタイプ
2. 仲間と考えたり、工夫しながら練習するタイプ
3. 顧問や監督が決めた練習計画にそって練習するタイプ
4. 考えたり工夫したりするよりも、全力をつくして練習するタイプ
5. その他()

望ましい タ イ プ	現 在 多 い タ イ プ
(66)	(67)

Q-3. あなたは指導者として、どのように指導するタイプが望ましいと思いますか。また、あなた自身は、どのように指導するタイプですか。それについて答えてください。

1. いつも自分で大部分の指導をするタイプ
2. 始めは自分ですが、徐々に選手にまかせていくタイプ
3. 始めから選手にできることはまかせ、必要に応じて指導するタイプ
4. 始めから選手に大部分をまかせるタイプ
5. その他()
6. わからない

望 ま し い タ イ プ	あ な た そ の 自 身 の タ イ プ
(68)	(69)

Q-4. わが国スポーツ界の将来を左右する重要な問題や事柄をいくつかあげてあります。あなた自身、今の立場をはなれ、次のそれぞれについてどう思われますか。率直な考え方をお聞かせください。

- | | 非正常と
によい | よ
い
こ
と | どい
ちえ
らな
とい
も | わ
る
い
こ
と | 非
常
に
わ
る | |
|--|-------------|------------------|---------------------------|-----------------------|-----------------------|----|
| (1) アマチュアリズムが緩和され、なくなる傾向にあること | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | ⑦〇 |
| (2) 選手の年齢が低下し、早くから選手づくりを始めること | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | ⑦一 |
| (3) マナーやフェアプレイの考え方方が形式化し、弱まる傾向にあること | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | ⑦二 |
| (4) 勝つためにジンクスや暗示を活用すること | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | ⑦三 |
| (5) コーチ養成や研修が制度化されつつあること | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | ⑦四 |
| (6) 大学の運動部などで、「4年神様、3年天皇、2年平民、1年奴隸」のような関係がいわれること | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | ⑦五 |
| (7) 報道記事にみられる「戸塚ヨットスクール」のようなスバルタ的指導をすること | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | ⑦六 |
| (8) 楽しみや健康のために、スポーツをする人が増えていること | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | ⑦七 |
| (9) ゴルフやテニスのように、コーチが職業として成立していくこと | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | ⑦八 |
| (10) 筋力増強剤などの薬品を服用すること | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | ⑦九 |
| (11) 冠大会といわれるスポンサー主催の競技大会が多く開かれること | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | ⑦〇 |

ご協力ありがとうございました。

日本のスポーツや、指導体制、選手養成などについて、ご意見ご要望などありましたら、(回答票のウラに)自由にお書きください。よろしくお願ひします。

